



目 次

震災の教訓と佛教……………	本多日生
佛の御心と我等の信仰……………	本多日生
天風三萬里紀行(其四)……………	小林日種
記 事……………	………
○北米の野口上人、	○各地教報

第三十四年十月號

東京市芝区新町町番地百八十一番地
 編輯兼發行所 佛子眞理子町番地一四八
 編輯兼發行所 磯部滿孝
 印刷所 都 印刷所
 電話號碼六〇〇四番
 東京市芝区新町町番地百八十一番地
 發行所 統一發行所

震災の教訓と佛教

(於統一閣大震災
七週年追悼講演)

大僧正 本 多 日 生

一、緒 言

本日は大震災の七週年追悼法要を営んだのであります。大震災の事柄に就てはその當時またその以後に於ても屢々お話をしたのであります。此の機会に今自分の心に浮んで居る事柄を申述べて見たいと思ひます。

彼の大震災の事實は頗る大きな驚きであつて、その當時人々はいづれも大驚愕、大恐怖を生じて、誰しも此の大きな出来事に對して非常なる感動を持たなかつた者は無い譯であります。併ながらその後の人心の情況を察しますると、非常にはやく此の傷ましき事實を忘れたやうな状態になつて來て居るの

であります。それが爲に一方には、日本人が斯様な悲しむべく驚くべき事實に對して、あまりそれを心にも留めずして復興の事業に従事して居る状況を、見て、非常に立派な國民だと言つて讚めた者もあるのではありません。又一方には、斯ういふ大きな事實を輕々しく忘れてしまつて上の空で暮す頼りない國民であると言つて、これを警めた者もあるのであります。此の二つの觀察はどちらが良いのかといふことはなかく、大事な問題であつて、七年後の今日に於てもそれはやはり活きた問題になつて居るのである。嘗に大震災の事ばかりではない、大にして考へれば人生觀の上に於て、日本國民の斯様な觀念が善いものであるか、悪いものであるかといふことを、

根本的に考察する必要があると思ふのであります。

それはあまり心配事を気にしないで、快活に勇ましくやつて行くといふことも、考へ方に依つては必要な事であり、善い事である。一つ心配な事があつたからといつてそれを気にしていつ迄もクヨクヨとヒステリックになつて意氣銷沈してしまふのも困る譯である。併しまた大きな心配な事をイ、加減なところで忘れてしまつて、スグ浮調子でフワフワやつて行くといふのも褒めた話ではない。そこに非常な大切な人間の精神の据え所の問題があると思ふ。一軒の家で言つても、或は親が死んだとか、女房が死んだとか、或は商賣上の蹉跌を來したとかいふやうな場合に、ムヤミに其事を氣にしてクヨクヨして居るのも困るし、又そんな事は氣にしないと云つて、親父が死んでも平氣で騒ぎ廻つて居るといふのも健全な人間とは言へない譯である。これを大きくして言へば日本の全体の民心の趨く所、或は日本人

話をするな、そんな事を想ひ出すより活動寫真でも見て今日一日をごまかさう……といふやうな調子で、この恐ろしい事實を本當に咀嚼てさうしてそれ以上に勇氣を起すのではなくして、唯だ卑怯にも逃げ廻つて其の事を忘れて行かうとする、意氣地のない態度のやうに考へられるのである。

それは實例に依つて考へればスグわかるので、一軒の家に於ても死者があると、その死者に對して本當にその死を悼み、その人の生前の事などを考へるといふやうなことはしない。女房なら女房が死んだといふことになる、その家族の者は、今までは枕頭に寄つて騒いで居つたけれども、いよ／＼冷たくなるとその部屋から逃げ出してしまふ。東京人の大部分の状態といふものは、モウ日でも暮れたら死者の傍に居るのは怖いやうに思つて、早くお坊さんを呼んで來い」と言つて、坊さんに番をして貰はなければ迷ひ出したら大變だといふやうな考で居る。さ

が奉すべきところの教といひ、道といひ、教化といひ主義といふことに就ても、此フワフワした精神から物を判斷することに依つて、いつも浮調子の淺い事しか日本の文化が捉へ得ないやうな事になるのではないか。そこで此の大震災が吾々に與へたる教訓と佛教の關係に就て、少しく立入つた上から考へて見たいと思ふのである。

二、災害と民心の浮薄

自分の考では、彼のやうな大きな出來事に對してはモット能く其の實相を十分に頭腦に打込んで、それを忘れないで本當にその恐るべき事柄を承知して居つて、さうしてその上に彼の大きな驚き、大きな嘆きを打消すだけの本當の勇氣を以つて世の中に立つて行かなければならぬと思ふ。所が一般人のやり方は、それを浮調子で忘れてしまふのである。「そんな事を考へると氣がクシャ／＼するからモウそんなうして勝手の方へは大勢出入の人間などがやつて來て、酒を飲んで無駄話をして景氣をつけてその寂さを紛らすといふやうな、實に野蠻盲昧な態度を以て此の深刻なる人生の事實を打消さんとするやうな状態に居るものである。

それ故に大震災の當時に於ても、面りそれを目撃した當座は非常に驚いたやうであるけれども、あの當時の詳細なる調査に依れば、約そ二ヶ月ぐらいにして大多數の者はそれを忘れてしまつたといふ事になつて居る。それはいろ／＼の事實が證明して居るので、私の知つて居る洋服屋の主人が語つて居つた所に依つても明かにわかる。それは斯ういふ大災害があつたのであるから、此の後は定めし人々が節約をして、衣服などでもあまり立派なものには拵へないだらうといふのでこれは大きな羅紗問屋であつたが、横濱に置いてあつた倉庫の羅紗は全部焼けてしまつた、少し残つたものは盗まれてしまつたといふ

譯で、早速英吉利に註文をして、先づ安いやうな品物を大部分、少しは高い物も註文した。所がその後幾干ならずしてドン／＼と洋服の註文が盛にあつた丁度停車場で切符を買ふ人が行列をなして居るやうな調子に、客が列をなして洋服の註文に行つたさうである。それが誰も彼も安い方は読へない、皆高い方ばかり註文する、少しばかりしか上等の品は註文してなかつたので、忽ち品切になつてしまつて非常に困つた。それで最初は、斯ういふ際だからといふので一割ほど値段を下げて、成べく安く賣らうと思つて居つたところが、仲間の店では皆一割ぐらい高く賣つて居るさうして高い方が餘計に賣れるといふ有様である。これでは詰らぬから自分の方も普通に賣ることにしましたと言つて居つたが、左様にしてあの場合に洋服の良い物を／＼と註文するといふのは、一体どういふ心理状態であるかといつて聞いたところが、「俺達はまア生きたんだから、死んだこ

を思へば生きて居る者は衣服ぐらいいは良いのを着たつて構はんぢやないか」斯ういふ考で皆やつて居る。食べる物もやはりさういふ譯で、「死んだことを思へば御馳走を食たつて構ふものか」といふので、死んだ人に比べて生き残つたといふ喜びの爲に調子を外してしまつて、衣食住の上に於て非常な奢つたやうな気分が旺盛に現はれて來たものであるから、一時は震災後却つて景氣が好いやうな有様になつて居つたものである。

けれどもダン／＼時日が経つて見ると、さういふやり方はやはりいけなかつたので、今頃になつて緊縮内閣といふやうなものが出來て、大いに節約宣傳をして、どうしても是は震災の創痍が癒つて居ないのだから儉約しなければならぬと言つて、七年も経つてから又出直してみたやういふ事をやる譯である、それは全くその通りであつて、確に震災の打撃は今なほ癒えて居ない譯である。けれども人々は本當にあ

いふ大災害に對して自覺する所なくして、唯だ成べく早くそれを忘れてしまつた方が宜からうといふ、チヨウド家の内に死人があれば酒を飲むとか、或は蓄音機でもかけて賑かにやるといふやうな調子でござかして來たやうな幼稚なやり方が、日本人の大多數の國民心理のやうに考へられるのである。これはナカ／＼一朝一夕には矯正せられない事で、緊縮内閣が二年や三年節約宣傳をやつても、ナカ／＼急には効果は舉らないと思ふ。どうしてもこれは永續的な教化を打込んで、日本人をモット徹底的に教へ込まなければ、この浮調子の思想が改善さるべきものではない。

それにはどうしてもモットと人生の深刻なる事實を十分に心に留めて置いて、その内から本當の元氣を出して行くものでなければならぬ。近來の或る學者輩が佛敎を評論して居るのを見ると、佛敎はどうも人生を消極的に觀て寂滅涅槃を教へる、あんなもの

は現代には役に立たない、斯ういふ言葉を吐いて居るが、その言をその儘受け容れる人が日本の相當な人々の間には多いであらう。佛敎といふものは人生の消極の側のみを説く、そんなものは駄目ぢや、モット元氣よく鉢巻でもして飛出すやうな調子でなければいかんといふ風に、日本の識者階級は考へて居る。一般民衆は譯もなくお祭騒ぎのやうに鉢巻をして飛出す、政治家も學者もさういふ現實主義といふか、表面的の勇氣に似たものをエライ事のやうに考へて居るこれは日本人の根本的の病弊であると思ふ。

三、大震災の惨害

彼の大震災の内に籠つて居つた一番大きな教訓は、ウカ／＼して居ると人生といふものはこんなものである、日本の國家もこんなものであるぞといふ事を痛切に教へて居る。即ち大震災が國民に與へたる第一の教訓は、此の恐ろしい災害が日本に與へた

る打撃、その痛苦をマザーと感じて、それを何處までも忘れぬやうに、魂の底に、骨身に沁み込むやうに與へられたるものが、天より來つた國民への教訓であると思ふ。二ヶ月や三ヶ月、精々二年や三年で忘れてしまつて宜い位の教訓ならば、あゝいふ激しい災害は要らないのである。あの大きな事實を、イ、加減な議論や上すべりの考で忘れて行くといふことは、實に國民として大きな損害であると言はなければならぬ。どうしても是れは忘れないやうに、モット／＼深刻に彼の惨害の事實を人々の前に示すが宜い。本年の九月一日の震災紀念のいろ／＼の計畫の中には、當時の震災の映畫を東京市民に各所で映寫して見せるさうであります。それはどの程度まで公開して見せるか知らんが、あの當時は最も惨酷な状態は市民に見せぬやうにしたのである。彼の時分に寫眞に寫されて居るところの極めて悲惨なる光景は、繪端書なども澤山出來た、或は新聞雜誌にも

載せようとしたけれども、皆これを禁止してしまつた、繪端書などは何十萬枚とも知れんほど、警察の手を以て押收してしまつた。それ等の悲惨な光景の寫眞は澤山今日も現存して居るので、一般の人間には見せないけれども、特別に見せて貰はうと思へば監視廳なり、又各警察署へ行けば澤山藏つてある。それは當時一般には賣る事を禁止してしまつて見せないやうにした、そこでなか／＼東京といつても廣いものであるから、實際にそれ等の惨状を目撃した人は兎に角、噂ぐらいで聞いて居つたのでは、本當の深刻なる彼の恐ろしい事柄を十分に知つて居る人は割合に少ないだらうと思ふ。

吾輩は特別の事情に依つて、あの當時の劇しい状態を具さに目撃したのである。それは今日も來會て居る岩野少將等と、戒嚴司令部の福田大將から依頼を受けて、惨死者の集まつて居る所に行つてお經を讀んで其の靈を吊つたのである。人々は殆んど呆然

として爲す所を知らないでマザー／＼して居る間に、吾々は一番はやく惨死者集合地點に行つて追善の回向をした譯である。それは市内の全部は行かれなかつたけれども、主なる場所はみな行つた、吉原の瓢箪池とか、或は待乳山とか、淺草區役所の所とか、或は隅田川、被服廠跡、濱町河岸といふやうな、惨死者の澤山集まつて居る所を、悉く自動車で巡つて回向をして歩いた、そればかりではない、その後東京市内の被害地の實況を視察して、或る場合には市民に話をするやうな事もあり、毎日々々自動車で燒跡を巡つて歩いた、十日間ほど馳け廻つた時に、初めて「あゝ實に此の被害の範圍といふものは思つたより廣い、えらい事だナ」といふ事が泌々頭腦に感じたのである。十日間も自動車で馳け廻らんければ、本當にあの時の被害の深刻さといふものは判らぬ位のものである。それが家に引込んで居つたり、他所へ逃げてしまつたりして、人の話ぐらい聞いた

やうなことでは、あの當時の災害といふものは本當はわかりはしない。實はモット／＼彼の激しい事實をマザー／＼と國民に示して、モウ連も眞面には見られぬやうな惨状を、本當に印象させたら宜かつたと思ふ。今からでも宜い、その押收してあるやうな寫眞などは、ナニもそんなに怖がることはない、モット／＼これを賣らして、其の恐ろしい状態を知らせた方が宜しいと思ふ。斯ういふ浮調子でスグに忘れて行くやうな國民に對して、あまりに神經過敏に心配をして、さういふ惨状を知らせてはいけない、……といふやうな事をやつて居るから、それが爲に浮華放縱の弊害といふものが除かれぬのではないか。それは天意を寧ろ損ねて居るものではないか、天意は寧ろ彼の當時の惨死者の屍を二ヶ月ぐらい曝して置いて、臭くなつて東京市民が顔向けの出來ぬやうな所を見せつけて、泌々と腦裡に印象させる位にやつた方が宜かつたのではないかと思はれるので

ある。此の事は震災後二、三ヶ月経つた際に、思想家が寄つていろ／＼所感を申述べた事があつて、自分分はさういふ意見をその際も述べたのであるが、今日もやはりその意見を有つて居るのである。

四、佛教の教化

それは何處からさういふ考が出て来るかといへば、佛教の教がその意味であることに依つて、自分はその意見を主張して居るのである。日本人が佛教を嫌ふのが、やはりそれと同じ心理状態ナンである、釋尊の説かれた人生の所謂四苦八苦の悲惨なる状態を正視しない國民である。すべて人生の恐るべき悲しむべき事實をハッキリと正面から認めない、横を向いてチヨット見るやうな事をする。殊に日本の女の人は、殆んど皆さうである、茲に一人の益死者があつたとしたならば、「あゝ可哀相だナ」と言つて傍へ寄つてハッキリ見る人は無い、「オ、嫌だ」と言

で飛び出すやうな所が活氣があつて日本人は良いといふ風に考へられて居つた。それが今日ではあらゆる方面の弊害になつて現はれて來て居るのである。人心が浮華放縱に流れて居るのも、あらゆる今日の社會問題となつて現はれて來て居る事柄も、何が原因かといへば、日本民族のその浮調子の精神のところに、いろ／＼これを煽動するやうな或は文學とか或は繪畫とか、或は活動寫真とか、又は言論とかいふものが加はつて、その結果斯様な状態が出て來て居るものである。要するに根本は日本國民の浮調子の精神がさまざまの弊害の根柢を成すのではないか、心に確乎した所があつたならば、そんな活動寫真を見たとつて、小説を讀んだつて、「何を言つて居るか、又つまらぬ事を言つて居るナ」と思ふだけで、決して悪い影響を受付けるものではない。いくらモダンガールが尻を振つて歩いたところが、海岸へ行つて薄い海水着一枚で太い足を出してヒョコ／＼やつて居

つて袂で顔を掩ふやうにしながら、それでも怖い物見たさで、横目でチヨイ／＼覗くやうな事をする。男であつたならば「あゝ首吊か、そんなものを見たら縁起が悪い、見ちやいかん、引返して廻り道をして行け」と言つて、まるで近寄らない。家へ歸つて來ても「マアそんな話はやめよ」と言つて、イ、加減な所で人生の悲惨なる事實といふものを打消して、さうして「そんな話をするより三味線でも弾いて、端唄の一つもやれ」といふやうな事でごまかして、人生を薄つべらに渡つて行かうとする者が多い。

これは永い間日本人にさういふ癖が着いて來て居る、無論むやみに悲哀に囚はれたる悲觀的國民となることはいかんけれども、併しまたあまりに浮調子の輕佻浮薄の國民となることも警しむべきである。從來は此の日本人の浮調子の所を、陽氣であるとか快活であるとか言つて、所謂江戸ッ兒の向録卷

つたところが、澤山見れば見るほど實に行儀の悪い女だ、變な風をして居るナといふだけで、ナニも別にそれが誘惑にも刺戟にもなるものではない。けれども精神の浮調子の者であれば、その大根のやうな脚を見て「これは女の脚だナ」といふので、そこに劣情を起したりするやうな譯で、ナニも其の事自身がナウ誘發するの、煽動するのといふものではない、精神に於てそれだけの確乎した訓練が足らぬ所から、何でもない事實が非常な大きな影響を與へることになるのである。どうせ世の中は廣いものであるからいろ／＼の者が出て來る、今日はモダンガールといふやうな者が出來て騒いで居るけれども、昔とてやはり藝者のやうな者は派手な風をして媚態を示すものや、いろ／＼あつたに違ひない、考へて見ればナニもそんなに違ふものではない。文學などでも小説に如何はしいのが澤山殖えたといふけれども、昔の小説にもモット／＼猛烈な描寫をしたもの

が幾らもある。けれども確乎した教化を興へて、先づ民心を所謂重厚といふか、重味のあるやうに薫化して置けば、さういふ事柄に依つてそれ程の影響は受けないのである。その點に於て現代は健全なる教化の衰へて居ることを寧ろ大いに憂へなければならぬ。どうしてもさういふ根本の問題を研究しなければ、日本の時弊を匡救することは出来得ないと考へられるのである。

五、三界火宅の教訓

そこでさういふ考をもつて彼の震災當時の事を考へて見れば、あの惨状はその儘佛敎の教訓に一致して居ると思ふ。法華經の譬諭品に於ける三界火宅の譬の如きは、實にあの當時の震災の被害よりもモツト激しいやうな事が詳しく説かれて居るのである。長者是の大火の四面より起るを見て、即ち大いに驚怖して是の念を作さく、我能く此の所燒の

あゝいふ大震災に遭つても、その震災の教訓を信受せずといふ状態になつて居りはしないか。それは一通り震災記念とか何とか銘打つて「あゝ九月一日」といふやうな事を言ふけれども、それも一分間グライ黙つて往來に立つて、「エライ事であつたナ」と言ふだけのことである。それはやらぬよりもまだだけれども、そんな形式的の事では、彼の大きな事實を興へられた天意といふか、その深刻なる教訓をあまりに無駄にするものではないかと思ふ。彼の震災の惨害の中には、人生の最も大事な事柄が教へられて居るのである。即ち人間の力の絶對ではないといふ事、一朝自然の力が動いたときに於ては、あの通りに日本の帝都が僅か二十時間にして半以上灰燼に歸してしまふ、人間も十萬以上の生靈が惨死し、さうして家を喪つたる家族はチリ／＼バラ／＼になつて非常な苦難を極め、日本の財産を失うたることは百億萬圓以上の損害を被つたのである。

門より安穩に出つることを得たりと雖も、而も諸子等火宅の内に於て嬉戯に樂着して覺らず、知らず、驚かず、怖れず、火來りて身を逼め、苦痛己を切むれども心に厭患せず、出でんと求むる意なし……是の念を作し己りて具に諸子に告ぐ、汝等速かに出でよと。父憐愍して善言をもつて誘諭すと雖も、而も諸子等嬉戯に樂着し、肯て信受せず、驚かず畏れず、了に出づるの心無し、亦復知らず、何者か是れ火、何者かこれ舎、云何なるをか失と名くる。但東西に走り戯れて父を觀み己みぬ。

火は四方より起つて子供等を燒殺さんとして居る、然るに彼等は燒かれても了に出づるの心無しで。父が懇ろに諭されたけれども敢て信受せず、その父の警告の通りに心得ないといふことが説かれて居る。この經文を具に熟讀玩味して見たならば、如何にも痛切に感じなければならぬので、チヨウド日本人が

る。今日東京の復興は、いろ／＼道路や橋梁やその他の形式的の方面に於ては復興の状態が見えて來て居るけれども、その内容實質に於ては未だ決して復興されて居るものではない。借金をもつて斯ういふ道路も拵へて居るのであつて、借金はその儘残つて居るのである。唯だ金を借りて來て仕事をすれば、それは表面は立派なやうに見える、一軒の家で言うたならば、店も商品も焼けてしまひ資本も失つてしまつて、親類から金を借りて來て漸く普請をして店を出して居る、店の外觀だけ見たならばエライ立派に復興して居るやうだけれども、その店を拵へた金から、品物を仕入れた金からみな借りて居る、それを拂へば何にも残らない、やはり灰だけしか残らないといふ譯である。内容の復興といふものは事實に於ては何にも出來て居らぬ、その被害はその儘ソツクリ残つて居るのである。斯様な事實はどうしても國民がモット／＼深刻に此の被害の程度を考へ

て、死んだ人も可哀相であるし、失うた財産も容易ならぬ事であつたといふことを深く肝に刻んで、さうして眞の復興の途に向つて努力しなければならぬ。斯ういふ偉大なる教訓といふものが、五年や十年で國民に忘れらるべきものではない。

大体日本人があまりに浮の空で調子に乗り過ぎて暮すから、それが爲にこんな大きな警告が來たのであると考へなければならぬ。戦争に勝てばいつでも浮調子になつてしまつて、折角戦争で勝つた大きな利益をば無駄にしてしまつて、さうして後に非常な弊害を遺すといふ、それでは國家が發展する途がない。都合が好ければ浮の空になつて飛び上る、都合が悪ければ意氣沮喪して弱つてしまふといふことで、どうして日本の前途が榮えて行くか。景氣が好ければ好いでチャント引締めて、それを有効に蓄へて行かなければならぬし、景氣が悪ければ奮發して勤勉力行、その困難を打破しなければならぬのは當

然の事であるのに、それが澤山の方法に依つて大騒ぎをやつて宣傳したり導いたり、いろ／＼しなければ行渡らない、やりかけては又廢めるといふやうな事になつて居る。こんど政府がいろ／＼の方法に依つて緊縮の徹底をはかるとか、或は教化の總動員をやるとかいふことで、洵に結構な事と思ふけれども、果してそれがどの程度に及ぶか、或はやはり中途半端でイ、加減な事に終つてしまふのではないか。緊縮節約といふやうな事でも、來年の二、三月頃に總選舉でも行はれるといふ事になつたならば、そんな緊縮ナンンといふ事はつまらぬ事ぢやといふ反對の運動も起つて、國民はどつちへ行つて宜いか適從する所に迷ふ。どうも不景氣は困る。大きにサウだ」といふやうなことで、やりかけた事を又廢めてしまふといふやうなことになるのではないか。あゝだ斯うだといつて悶えて居る間に、國運の前途といふものはだん／＼面白からぬことになるのではない

かと憂ふるのである。

六、佛教の人生觀

さういふ事柄に就て本當に覺めて、モット／＼深刻に人生といふものを奥深く考へて、そこから元氣が出て來るやうにならなければならぬ。佛教の人生觀はその事を強く教へて居るものである。然るに佛教といへば消極的のものであるとか、掌を合せるといふやうな事は人に依頼することだから人間が弱くなる……といふやうな事を言つて居る。そんな浮調子の議論に賛成して行くやうな頭腦では、日本の將來は榮えることは覺えないと思ふ。本當の人間の勇氣、本當の元氣といふものは何處から出るか、例へば日蓮聖人の彼の剛勇果敢の言動でも、決して浮調子から出たものではない、日蓮聖人の優しい慈悲の心より現はれ、日蓮聖人の敬虔なる宗教信念より起つて、遂に鐵石の如き彼の勇氣が現はれて居るこ

とは明瞭である。唯だ浮調子で強がりと言ふやうな、辨慶が薙刀を振廻したとか、或は塙圍右衛門が大きな刀を振廻したとかいふやうな、さういふ表面的な蠻勇を以つて豪いと日本人は考へて、精神の底から訓練せられて非常な正しい意味の信念なり理想なり、その奥深い心の奥より湧いて出たところの強い力といふものを理解しない、唯だ空元氣で威張るやうな者が豪いと考へて居るならば、さういふ國民は決して健全なる發達を遂げ得るものではないのである。

お釋迦様は深刻に人生を觀察せられて、彼の四門出遊の場合のごとく、人生には年を老る、病氣に罹る、死ぬるといふやうな苦がある、それが人々の心を悩ますことに依つて人生の眞の幸福が得られない、又それが爲にいろ／＼な弊害も起るのであるから、この恐ろしい人生の苦痛を精神的に根柢から癒して、所謂生老病死に對して怖畏を懐かず、悩みを

有たない、眞の精神平和の生活を導き、その中よりして理想を立て、さうして菩薩行の勇往果敢の活動を起すやうにしてやりたいものだといふ事を教を立てられたのである。それ故に法華經のやうな積極的の教の中にも、譬喩品の三界火宅の教があつて、その三界の火宅を脱れるが爲めに非常な快活なる運動を喚起して、菩薩行の積極的行動といふものを獎勵されて居るのである。此の佛教が教へて居るところの、人生の悲哀の事實を精神の内から救つて行くといふことを認めないで、所謂人生を表面的の樂觀主義といふか、著世主義、淺薄なる現實主義を以て國民を導いて居る限りは、現代のやうな輕佻浮薄の弊害は將來永久に除くことは出来ない。

さうして又この偉大なる宗教の信念に基かない限りは、彼の狂暴なる危険思想などが跋扈して、次から次へとそれに感染れる者が絶えないことになるのである。モツと深く人生を理解せしむれば、あゝい

信念であり理想であるといふことに、人間を造り上げなければならぬ。一時宗教の信念や道德の觀念が弱いやうに見える場合があつても、それは人々が墮落して居るのであるから、どうしても人間は道德なり宗教なりの信念に依つて動くやうに進んで行かなければならぬといふ目標を以て、人生を導かざる限りには、人類の文化は決して向上進歩するものではない。一たび唯物史觀のやうなものを許して、人間の精神を支配し文化を支配する最大の力は物質である、その物質の内に政治もあり法律もあり、宗教もあり道德もあるのである、物質を離れては道德も宗教も成立するものではないといふ風に、一番大事なものも物質であり金錢であるといふことにして人生を導くやうな思想を許すならば、その時にもはや道德や宗教といふものは權威を失墜して物質の奴隷と化してしまふ、さういふものが決して世の中に本當の力を現はすことは出来ない。それ故に我等の

ふ思想は自然に傳播する餘地が無くなるのである。共產主義の如きは如何様に研究して見ても、結局は唯物史觀の上に立てられて居るといふことは、すべての學者の意見の一致して居る所である。唯物主義を肯定し、唯物史觀を前提とするならば、共產主義のやうな思想も必しもこれを否認することは出来ない。併し人生は決して唯物主義的な解釋は許されないものである、表面には人間は非常に強く衣食住の事に力を入れて、それが一切を支配するが如くであるけれども、モウ一つ深い人類の文化といふものは、所謂精神生活の方面を除却することは出来ない、そこには宗教の信念、道德の觀念といふものに依つて人間は導かれて進んで行くのである。これは千古に通じて譲らざる文化の原則である。故に唯だ肉身の慾望を以て人間は最後のものとすることは出来ない、一時はさういふものが表面に強く働くけれども、それは我が志ではない、最後の我を支配するものは我が

最も力を入れて闘ふべき方面はそこに在る、勿論人生には言ふまでもなく衣食住の必要といふものは何處までも伴いて行くけれども、それよりも更に尊い所に精神生活がある、所謂道德があり宗教があるのであるから、それは無論相俟つて發達して行くべきであるけれども、就中何れを探るべきかといふことになれば、身を捨て、道を信じ、衣食より離れても正義に與るといふことに最後の結論を置かん限りに於ては、人間の世の中といふものは存在するものではない。古今東西の聖者哲人は其の點に於ては皆其の揆を一にして同じやうな考を有つて居る、殊にお釋迦様の如きは最も力強くそれを教へられた方である。

その奥深い精神主義の教を打立てずして、唯だ表面からこの人生を導いて行かうとしても、それは必ずや失敗に終るものである。今の日本の健全思想と謂はれる側のものは、多く單に日本の國が偉大であ

るといふ、國自慢のやうな精神で行かうとするのである、それも決して悪い事ではないけれども、日本人なるが故に日本の偉大を信ずるのは宜しい、併ながらその偉大といふことに内容が無くてはいかぬ。唯だ日本がえらい／＼と言つても、空威張であつたならば誰も感心する者はない、日本人の精神が立派でなければならぬ。その精神の内容には今言ふやうな深味を有つた文化を有するものでなければならぬのである。

それであるから後の大震災は三界火宅の事柄を事實上に教へたものである。この三界火宅の教訓よりして真に活きたる活動に就いたるものが佛教である。それ故に、佛教を歴世悲觀の教だナンと言つて嫌ふやうな思想を持つて居る所には、やはり大震災の事實などでも一日も早く忘れてしまつて、空元氣でも宜いから景氣好くやりさへすれば宜いといふ浮調子の思想が起つて來る譯である。即ち現代の日本は眞

の佛教の教訓の妙味を味ひ得ないために、此の大震災に遭遇してもその大なる教訓を本當に受入れることが出来ないであらうと思ふ、これは洵に愴かましい事である。

七、安政震災の回顧

毎年九月一日の震災記念の運動には吾々も關係をして参つたのであるが、いろ／＼骨を折つて漸く衆を集めるのである、東京あたりでもナカ／＼此事に就て刺戟を與へるが爲には容易ならぬ努力を要する、こんど教化聯合會の方に於て計畫して居るのも、飛行機を飛ばしてビラを撒いたり、澤山のポスターを貼つたり、或は小さな印刷物を配つたり、或は電車の乗換切符の裏面に「あゝ九月一日」と書いたりいろ／＼するのであるけれども、併ながらそれは一種の空騒ぎだけで、一般の國民の頭腦は、九月一日が來たからといつても別段の感じもない、「あゝ今日

は九月一日か、地震の年も暑かつたナ」といふやうな譯で、何等深刻なる觀念を持たないのである。

これに就て彼の安政の江戸の大地震の當時の状態を記録に依つて回顧して見るといふと、當時の國民の方がよほど確かりして居る所があるやうに思ふ。焼け出された人間は、まア生き残つたから幸福だ、死んだと思へば贅澤にしても宜いといつて高價い衣服を拵へたり、そんなやうな浮いた調子の事は決してやつて居らない。死んだ人に比べれば生きた者はどんな苦しい目に會うても辛いことはない、死んだ人の事を思へばどのやうに不味い物を食つても、どのやうな生活をして、生きた方は結構すぎて居るのである、斯ういふ事をさかんに言うて居る、それが當然である。生きたのが結構だからと言つてむやみに御馳走を食ふといふ行き方は、放蕩息子みたいなやり方である。當時の人々は、生き残つた者は死んだ人に比べればこれ程結構な事はないから、先づ

第一に死んだ人の靈を弔つてやらなければならぬ、それには孰れも宗旨があるからお寺を一番先に拵へなければならぬといふので、自分の家を普請する前に、死んだ人の家から拵へてかゝらなければならぬといふ譯で、寺を最先に拵へた。あの時は十一月の大地震であつたに拘らず、大体江戸中のお寺を翌年の三月までに再建してしまつた。さうして安政の時には今度よりも餘計に人が死んだのであるが、皆それ／＼のお寺で追善の法要を營んで、それからその翌月が四月で花見といふことになつた。花見には一つ景氣を出さう、その前にお宮の祭禮をして、櫛で拵へた神輿に注連繩を張つて擔ぎ出して賑やかに祭禮をやつて、それから花見といふので、思ひ／＼に瓢箪を擔いで花見に出かけて、これから大いに元氣をつけて働かうぜといふ風にやつたのである。その順序の考へ方なすが、實に今日の人々の考よりはズツト順序よく考へられて居ると思ふ、それは繪卷

物などがあつて、その災害の光景から復舊の状況が
順序よく描かれて居る、それを見ても災害後一番始
めに寺院が出来て居る。然るに今日の東京を見て御
覽なさい、寺院の復興の状態はどうであるか、實に
ひどい有様である。被服廠の跡にも記念の建物を建
てるといつて居るけれども、七年経つてまだ一礎
なものは出来上らない、さうして最初の内は九月一
日には何十萬人といふ人が参拜して居つたが、本年
の九月一日に行つて御覽なさい、被服廠の跡へ行く
人間もだん／＼少くなるに違ひない。實に今日の國
民は所謂現實主義の最も悪い風潮に感染れて居る、
これはモト／＼日本人が浮すべりの癖がついて居る
ところへ、西洋の皮相なる現實主義を受入れて來て、
今や一層悪くなつて居る實況である。

どうしてもこれは震災の事柄のみではない、人生
におこるどころの深刻なる事實を指摘して、モット
／＼深く人生を見詰めた上から、眞の信念に基く勇

氣を鼓舞して人生に奮闘する國民を造り上げなけれ
ばならぬ。

八、文化補正の警告

要するにいろいろの點に於て日本の文化の中には
淺薄な部分があり過ぎると思ふ。知識をいへば唯だ
科學知識にのみ流れて哲學の深遠なる思想を重んず
ることを忘れ、道徳を語れば或る一面の事のみを考
へて、人生の全面に關係する所の所謂道義の大本を
明かにしない。宗教を語れば唯だ浮調子の信仰を論
じて、深遠なる思想を有する宗教に來らぬ、佛教を
受入れても方便の佛教に流れて、お地蔵様がいゝと
か或はお藥師様がいゝとかいふ位のことで、本當の
佛の教の尊い意味を傳へない、名は佛教であるけ
れども、成田の不動であるとか、或は川崎の大師で
あるとかいふやうな信仰は、ナニも佛教ではない、
全然婆羅門教である。佛教の名に於て婆羅門教に墮

落する程なる幼稚な状態である。あらゆる點に於て
どうも日本人は思想上から言へば淺薄なる缺點のあ
る國民であるといふことが考へられる。日本の固有
の思想といふやうな事を非常に謳歌し讚美して居る
人もあるけれども、惟神の教を解釋する上に就て
も、聖賢の教を受入れる上に就ても、また佛教を咀
嚼する上に就ても、過去の日本の文明に於て一切が
完成して居ると思ふのは間違ひである。また／＼日
本は惟神の教に就ても研究もしなければならぬ、儒
教佛教に就ても大いに鐵仰を進めて、さうして日本
の文化を明にし、尙ほ日本の民心を陶冶して、モ
ット立派な國民を仕上げて行くやうに努力しなければ
ならぬ。その大きな自覺を促す所のものが佛教の
教化ナンであるが、佛の教だけではまだ日本人が覺
醒めないから、その佛教の教化の深意を自覺せしむ
る爲に大きな刺戟を天より與へられたのが、大正十
二年の大震災であつたと自分は信するのである。

此の大きな警告を與へられても覺醒めないやうな
事であるならば、本當の佛教は日本には到底華は咲
かないのではないか。あれほどの大きな事實に當面
した東京市民が、今でも成田の不動であるとか、川
崎の大師であるとかいつて騒いで居る、成田の不動
は火事を護るといふが、あんなお札を山ほど積んで
置いても、一べんに焼けてしまふぢやないか。こん
な大きな事實が眼の前にあつても、また／＼成田の
不動へ行つて節分に豆を拾つて來るといふ、そんな
幼稚な事の爲めに臨時列車が出るといふ騒ぎであ
る。其のやうな暗昧なる事柄は、速に改善して、國
民が正しき意味の宗教信念を持つやうに、今日より
一層教化の普及に努めなければならぬと思ふ。現今
の當面の緊縮宣傳の運動といふやうな事は、何なり
ともやりさへすれば宜いといふ譯で、教化總動員と
いふやうな事もどうせサウ深い所までは徹底しまい
と思はれる。併し法華經を奉じ日蓮聖人の御教に依

つて立つ所の吾々は、どうか日蓮聖人が心血を注いで絶叫せられたが如くに、この尊き教この尊き國家をして彌が上にもその光を發揮せしむべく、法國の爲めに奮闘を續けなければならぬと思ふのであります。

吾々が大地震に就て、又これから得たる教訓に就て考へて居ることは以上の如き意味合であります。どうか諸君はモット／＼震災の事實に就て能く記憶を喚起して、その當時の印刷物を讀むなり、又寫眞を見るなりして、此の震災の恐るべき事實をマザ／＼と復活して、さうしてその中から本當の觀念を養ひ來り、そこに佛教の教の彌が上にも尊いことを考へられて、唯だ表面から見れば佛教は消極厭世の教であるなど、言ふ者もありませんが、それは研究の足らぬ者の言ひ草である、又事實に於て厭世悲觀のやうな間違つた方向へ越つて居る佛教徒もありませんけれども、それは佛教の學び損ひである。眞の釋尊

の本旨は、人生の缺陷を見つめてその中から堂々たる菩薩の精神に立つて、チヨウド日蓮聖人に於て見るが如くに、洵に優しい慈悲心と穩和なる信念の中から勇往果敢の活動を起すところに本當の佛教があるのであるといふことを領解して、お互ひはその意味に於て設ひ一分たりとも法國の爲に御奉公を捧げたいと考へる次第であります。(完)

此の如き闢謬堅固の時は餘經の白法は驗し失せて、法華經の大良藥を以て、此の大難をば治すべしと見えたり。

日蓮聖人御妙判(一六八〇)

佛の御心と我等の信仰

大僧正 本 多 日 生

今日佛教を奉じて居るところの僧侶なり信者なり信仰の状態を見ると、區々になつて居つて、その内容に於て面白くない事が多いやうに思ふのであるが、それは何から起るかといふと、佛教と言ひながら一部分の小さなお經に執はれて居るが爲に、その信仰が癖づくのである。觀音の有難い事が説いてあるから觀音様を信するとか、地藏の有難い事が説いてあるから地藏様を信するとかいふやうな譯で、部分的に説かれたお經の方から入つて行く爲に、いろいろの信仰が起るのであるが、これを根本に戻せば佛教といふものは釋尊の御心から出て來た教である。さういふ途中の引掛りを斷つて棄て、直接に佛様の御心に突入して考へて行つたならば、モット

簡單に佛教の信仰は了解せられて、いろいろ癖づいた所が無くなるのである。それ故に「佛の教と信仰」といふことは普通に使はれる語であるけれども、いまだ姑く教といふことを考へないで、先づ佛の御心を考へて見たならば、そこに善き信仰が成立つてはなからうか、教の語に感激する前に、佛の思召、佛の御心に感激感孚することがなければならぬと思ふのである。三寶に歸依するといふことは、第一は佛に歸依し、第二は法に歸依する、法とは教であるが、その教に歸依する前に佛に歸依するといふことがある。その佛に歸依するといふことは、いろいろ佛様に尊い事があり、有難い事があるけれども、押詰めれば佛佛の御心の有難い事ナンである。

だから教に就て感心するとか、佛教を弘めた人に就て感心するとかいふ、その感心をだん／＼本に戻すと、一番根源は佛様の御心に感心するといふことが出發點になるやうに思はれるのである。

これは他の宗教に就て考へたら簡單にさうなつて居ると思ふ。例へば基督教に依つて信心すると言つたならば、神様が一番有難いと言ふ、それはどういふ譯かと言へば神様の御心が有難いといふことであらうと思ふ。又佛教でも、念佛の徒が南無阿彌陀佛といふことを言つて居るのは、何が有難いのかと言つたら、阿彌陀様の御心が慈悲の優しい心であつて、それが有難いといふ事である。その他の神様を有難く思ふにしても、その神様の御心が有難い譯ナンであつて、佛教を信するといふ者は先づ釋尊の御心を能く考へて見て、そこに第一に感心しなければならぬ。いろ／＼枝葉の事に流れて、小さな所に感心して、根本の釋尊の御心を有難く思はないで、忘れて

しまふナンといふやうなことは、末に流れて本を忘れる者であると思ふ。

廣く一切經を見ると、お經と言つてもその善い所は即ち佛様の心が説いてあるのである。書量品が一番勝れて居るといふのも、だん／＼考へて見れば書量品には佛様の御心が歴々と現れて居るのである。我は斯ういふものであつて、何時も斯ういふことを考へて居るといふ、その佛心の有様が説かれて居るので、即ち書量品の最も尊い所は「毎に自ら是の念を作す、何を以てか衆生をして」といつて、我は毎も／＼斯ういふ風に考へて居る、どうぞして迷へる者を救つてやりたい、苦しめる者を慰めてやりたいといふことを、夜も晝も休み無く考へるといふ、佛様の心が明瞭に現されたのである。それをたゞ書量品を信するとか、法華經を信すると言ふから、その語に執はれて廻り遠くなつてしまふ。そんな所に引掛らないで佛様の御心の有難い所に突入して行くこ

いふことになれば、簡單明瞭に信仰の意味合が了解されると思ふ、そこで「佛の御心と我等の信仰」といふ講題を掲げた次第である。

佛様の御心は如何にも有難い事であり、又廣大無邊な事であるので、つまりは一切經と言つても佛の心の顯現に外ならないのである。その佛の御心は何を中心を押へるかと言へば、無論大慈大悲の優しい御心を取るののであるが、併しそれだけでなく、その佛の御心の纏つて居る工合といふものは、如何にも微妙な有様のものであつて、その微妙な有様が能く考へられると、我等の信仰も亦好い工合に微妙な味ひが出て来るのである。佛様の親切に感じたといふだけで、たゞ有難いといふのでは、まだ佛教の信仰が本當の意義を成さぬと考へる。

それはどういふ所を考へてさう言ふかと言へば、佛の慈悲といふことは、たゞ佛の優しいといふ一點を押へてこれに慈悲といふ名を附けて居るのである

けれども、佛の御心の有様は何とも言ひようのない微妙なものナンである、本當は慈悲とか何とか小別をして言へるものではない。そこで所謂佛の覺り、佛の御心を言ひ表はす時分には「妙覺」といふ文字が使つてある、或は正覺とか大覺とかいふ文字も使つてあるが、本當は妙覺といふので、それが一番語

としては工合が好いやうに思ふ。その覺られて居る意味のどういふ所に「妙」といふ字を附けて居るかと言へば、所謂真理の側に於ては其の物の本質、その實際を照らす上に於て、間違はぬやうに能く御承知になつて居る。宇宙に對しては所謂實相を覺り、衆生に對しては衆生の機根、その者の利根鈍根及び罪障の輕重、いろ／＼の事柄に就てその眞實を知つて居られる譯である。これを假に大根を作るといふことに譬へたならば、その百姓は氣候の事も知つて居れば、大根の種子の善惡も知つて居れば、畑の耕し方も、肥料のやり方も何もかも知つて居る、良き大

根を作るに就て知らなければならぬ事柄をスツカリ知つて居る。ところがそれと同時にたゞ知つて居るといふだけではない、一つ美味い大根を作つてこれを人に食べさせたい、お祖母さんなり、お父さんなり、或は女房なりに、八百屋では買へないやうなうまい大根を作つてこれを食べさせて見やう、さうしたら喜ぶだらうといふやうに、そこに親切が加はつて來るのである。たゞ親切ばかりあつてもガリ／＼の大根を作つたといふのではない、上等の大根を作る能力を有つて居つて、さうして美味い大根を食はしてやらうといふ親切がそこに動いて居る譯である。又そこに親切だけでなくして、それを作ること非常に楽しみである。自分が他所へ遊びに行くよりも、芝居を観に行くよりも、大根畑へ入つて草を除り肥料をやり、大根が日々成育するのを見て「ア、立派に出來て居るナ、これはお祖母さん上げるのだ、これは女房に食はすのだ」といふ目的の爲に、

雨が降つて路が悪い場合に於ても、或は炎天に背中で照される場合に於ても、その勞苦を厭はずして働いて居る。即ち親切の心と、悦びの心と、その事柄の眞實を知つて居るといふ事とが皆結合されて、激刺として働いて居るやうな意味になるのである。佛様が吾々をお救ひ下されるといふことには、少くもその三つの側がある。即ち智慧の側と、慈悲の側と、モウ一つはその事を喜び勇んでなさつて居る、これを佛の法樂と申して居るが、ニコ／＼してなされて居るその意味合である。この三つの中では殊に喜び勇んでなさるといふ意味が非常に強いのである。たゞ親切といふのではない。親が子供を育てるのも、親切はあるけれども、併し骨が折れる「どうもこの子供は重い」とか「夜眠たい時にギャア／＼泣いて困る」とかいふことになれば、親切はあつてもそこに勢ひも抜けて來れば、妙味も減つて來るのだけれども、「ナーニ夜通し泣き通しても何とも思は

ぬ」といふ勇ましき親切の心と、さうしてその者の病氣を癒すとこのろの智慧と、皆揃つて活躍して居る。即ち上等な看護婦でもあれば、非常な強壯な體力を持つて居れば、一番美味い乳も飲ますといふやうな工合に、自分の無い親といふやうな意味で親切といふことが考へられて來なければならぬ。佛を念ふ場合に於ては、さういふすべての善い方面の揃つて居る意味合を能く味はふことが根本問題のやうに思ふ。たゞいきなり「佛様は親切だ」、「ア、さうですか」……簡単に應對をしてしまふ所に、佛教徒の從來の研究及び宣傳に於て多大な錯誤を生じて居るやうに考へるのである。そこで親切の佛だとか、智慧の佛だとかいふやうなものを澤山拵へて、ちやうど伏見人形でも拵へるやうに佛様を考へて居る、「こつちは親切の佛」……「こつちは威張つて居る佛」……「こつちは泣いて居る佛」……といふやうに、いろ／＼拵へて一々別な名前を附けて、一人格の佛を澤

山に人格を分離させてしまつた。お地藏様は圓い顔をしてニコ／＼して居るとか、文珠様は威張つた顔をして居るとか、妙な人格の分裂を來してしまつた。だから「私は顔の圓いお地藏様が好きた」とか、「イヤ私は少しビツツとした文珠様のやうなのが好きた」とか言つて、いろ／＼と佛敎の信仰が分れて行くのである。對象の人格に分裂をさせるから、随つてこちらの信仰にも分裂を生ずるのであつて、一人格の釋尊が圓滿、完全といふことを理想せしめたならば、どういふ要求でも、どんな考でも皆そこに揃つて行くといふことにならなければならぬのである。釋尊が成道を遂げられた時に、菩提樹の下に於て覺りが完成を告げた、その覺られる前からの光景がお經に出て居るが、それは今言ふ通りにたゞ親切といふ側がバツと光つたとか、或は物を照す智慧といふ側が光つたとか、嬉しいといふ側が光つたとかい

ふやうな部分的なものではない。三明六通といふ語で表はされて、どれもこれも皆光るやうになつた。電燈に譬へたならば、幾つもある電燈が皆一時にパツと光るやうに、親切の電燈も光つた、賢い電燈も光つた、嬉しい電燈も光つたといふ譯で、それが三明六通と言つて順々にパツ／＼と光つて行く、さうして時間になれば夜半の十二時頃から佛の御覺りが完成に向つた事が書いてあるが、ちようど夜明の明星の時に至つて全部の電燈が皆點いてしまつたやうに、これで精神の全部が覺つたといふことになつた譯である。さういふ風に覺りの意味合がパツパツと皆光つたといふことは、佛の御心の完全、圓滿に整頓して居る事を表はしたものである。それ故にいよいよ覺りが完成した時には七日七夜の間、眠りもせず、食物を攝らすして、たゞ菩提樹といふ大きな樹を見詰めて居られたといふことになつて居るが、その時の精神が智慧であるか、慈悲であるか、悦びで

といふその心をモツと精しく説明しなければならぬといふので、佛の御心のその妙覺の意味を詳説したものが華嚴經八十卷になつて居るのである、それは八十卷もある廣大なお經であるから、智慧の側も説いてあれば、衆生を救ふ力の側も、慈悲の側も、悦びの側も、あらゆる精神の活躍が華嚴經八十卷に説かれて居る。それがたゞ心の内面の作用でなくしてその心が外に現れていろ／＼の作用をなす爲に廣大なる活動を起して居る。その光景は活動寫眞などでは割合にさういふ有様を映し出すことが出来るので、非常に面白いと思ふ。例へば茲に一人の書生が、自分の將來の事を夢見ていろ／＼空想に耽つて居る、下宿屋の机に肘を突いて坐睡をして居ると、そこに夢現のやうに、その青年が綺麗な娘と結婚することになつて、自動車に乗つて式場に行く、それから箱根に新婚旅行に出かけて、歸つて來ると大きな會社に雇はれることになつて、重役に可愛がられて

あるかといふことになる、その一つを探ることは出来ない、パツと覺つた時に宇宙の眞理も、人々の機根も、皆照すところの智慧の光も輝いて居れば、一切の惑れな者を救つてやらなければならぬといふ慈悲の心も輝いて居れば、又自分が覺り得て衆生を導く力の具はつたことを悦ぶ法樂の心も活躍して居るのである。

而してその中で最も強く現れて居るものが悦びの心になつて居る、親切の心、智慧の心と同時に法樂の心、その悦びの心が就中最も強い力で起つて居る。それが爲に七日七夜眠ることを考へず食物を考へず、たゞ何とも言へない悦びの精神に満ちて居つたのである。それが最初の説教の阿含などに説かれて居ることで、即ち佛本行集經の成道の光景を説かれた所はさうなつて居る、他のお經にも成道の光景を説けば大抵さうなつて居るのである。それをモウ一層詳しく成道の時の一念、瞬間のバツと覺つた

巴里の支店長になつて華かな生活をするやうになつた、さういふいろ／＼の光景が寫眞に現れて來るところがその夢が醒めて見ると、やはり下宿屋の破れ机に突俯して居つたので、眼の前には下宿料の催促の紙片が來て居るといふやうな場面が映畫に能く出て來る。あれが非常に面白い意味合であつて、その中には嬉しかつた事もあり、或は悲しい事もあり、船に酔つた事もあれば掏摸に出會ふ事もあれば、非常に愉快な結婚式を挙げたと思つたらその女房が逃げてしまつたといふやうに、いろ／＼の事が變化して來る。それを元に戻すと机の上に坐睡して居る一念の現れであつたといふことが活動寫眞に依つて能く現される。これはつまり書生の空想であるけれども、お釋迎様のは空想でない、本當にこれから自分か一切衆生濟度の爲に、斯ういふ事をやつて……あゝいふ事をやつて……といふことが、その瞬間にバツと覺られた中に現れた、それをチヨウド今の映

畫のやうに現したるものが大華嚴經八十卷となつて居るのである。

であるから佛の御心といふものはさう簡單に、親切だとか、賢いとか、そんな小さな葎の繭から天井を覗いたやうなことは言へない。佛の精神は所謂全智全能、完全圓滿、慈悲に於ても、智慧に於ても、活動に於ても、裏も表も何もかも皆揃うて居るものだといふことに就て感孚感激する事を原則にして掛らなければならぬ。それを「お釋迦様は親切だといふけれども、どの位の親切か、自分をやうな者も助ける力のある親切か、そこを聞いた上でなければ安心が出来ない」と言つて、佛の御心に向つて無暗に危んだり疑つたりしてまご／＼して、さうして「どうもお釋迦様だけでは力が足るまい、阿彌陀様も頼まう、觀音様も助けて下さい」……さういふ風に釋尊の御心の力を疑ふといふことを今の佛教徒がやつて居る。そんな馬鹿氣な状態といふものはない。今

そこでその佛の御心を慕ひ奉るといふに就ては、佛の親切の側に對して、何時も吾々を教ふ爲に御心配下されて居ることは洵に有難い、今斯うして話をして居る時でも、佛様は我等を教はうとお考へ下されて居る。併しそればかりでない、その佛様の悦んでござる心持を我等に傾ち與へようとして居られる。佛は如何なる場合に於ても決して苦しみ悶えるとか、又は心配でどうもならぬといふやうなことはない、いつも佛は悦びの心に満ちて居る、所謂常樂我淨と言つて、常に樂んで居ることを以て佛の境界とするのである。そこでお釋迦様は最初に覺りを開いた時に、モウお經などは説かないで、いきなり涅槃に入らうかといふことをお考へになつた。その心持は、衆生の状態があまりに面白くないから、斯ういふ條理立つた事を自分が説いてもわからないだらうといふことも一つはあつたけれども、一番大きな原因は、自分の今のこの悦びと人間が苦しみ悶

申す阿含經に於て、成道の時に七日七夜悦びの心に満ちて居られたその釋尊の覺りから考へ、華嚴經八十卷の内容が成道直後に於ける瞬間の一念であるといふことから考へて見ると、大体佛敎の根本觀念は今の多くの人が釋尊に對して餘計な事を疑つたり論議したりして居るやうなものではない、それは實に釋尊に對する侮辱である、不敬である、さういふけちな事を佛に就て考ふべきものではない。これが基督教の方では、話は粗末であるけれども、神様を能く信じさせることになつて居る、神様は全智全能、出来ない事は無いといふことを初めに言うて居るからそれで話が済むけれども、佛敎ではお釋迦様に就て、却つてその力を値切り小切りして小さく考へるやうな悪い癖が附いて居る。さういふものを許さぬといふのが即ち法華經の大精神である。壽量品の心髓はそこにあるので、日蓮聖人のあの當時の折伏もそこから出たことである。

えて居る有様とは、その間にあまりに距離があり過ぎる、自分はこれほどの悦びに満ち／＼して居るに拘らず、彼等衆生は苦しみ充滿の世界を見て居る、お自我憫の中にも説いてある通り、「憂怖諸の苦惱是の如き、悉く充滿せりと見る」實に結構な楽しみが天地宇宙にはあるのだけれども、それを取容れないで苦しみ充滿の有様だと考へて居る。その衆生の状態と我が覺りとの間はあまりに距りが大き過ぎるから、これは到底話をしたところが無駄である、涅槃しようとお考へになつたのである。けれども又考へ直されて見ると、この自分の悦びを頷つことが出来る、どうぞして自分のこの悦びを人々にも得させたものであるといふことから法をお説きになる、そこに慈悲が輝いて居つたのである、たゞ慈悲といひ、親切と言つてもどういふことが親切であるかを考へなければならぬ、自分には斯ういふ悦びがあるのに彼等衆生は苦んで居る、その苦を除いて、これ

に代ふるに我が得て居るが如き悦びを與へたいといふことに依つて、親切といふ語が活きて來るのである。即ち佛様の悦びが吾々に興へられる、そこに佛の親切といふものがあるのである。

さうすると吾々が佛様に就て感孚して、それに倣つてその有難味を享けて行くといふことは、その親切に感激するばかりではない、佛のやうな悦びの心を吾々が享けることナンである。それ故に佛様と吾々の信仰が感應を起してそこに結合が出來たといふ時には、たゞ「この親切がお前の方に届いたか」「へい、届きました」……さういふことを言ひ居るのではない。感應といふ時分には、佛様の親切は無縁である。故に佛を信するといふことは、たゞ有難く思ふといふことよりも、自分の苦が減じて、佛様の

佛を信じ、佛に感孚した人と謂はれる譯である。そんなにえらい人でなくとも、佛教を信するやうになつた時には必ずさういふ意味合の事が現れて居る、お經の中に於て見ると、貧しいお婆さんが佛様に依つて導かれた、こんな有難いことはない、嬉しい事はないといふので、何か佛様に捧げたいと思ふけれども、何も自分として持つて居る物が無い、そこで山に行つて木の實を取つて來てこのお禮に捧げたいといふので活き／＼として山に行つて居るのである。或は勞働者の妻が、夫の留守に佛の説教を聞いた、どうも嬉しくて堪らないといふので、信心をすると言つても大きな聲でお經を讀んだ譯ではない、たゞニコ／＼して快い氣分に満ちて居つた。いつもは亭主が歸つて來たならば怒つたやうな顔をして居る、然るに今日は女房が機嫌よく出迎へて「さぞ疲れたでせう」と言つていろ／＼親切に世話をする、あまりに女房の態度が變つて居るので「これは變だ、

やうな樂しみが幾分か増加して行くことが、佛に對する感孚感激である。それ故に本當に信心して居る者が有難いといふことは、即ち悦びを言ひ表はすことになつて居る、随つて「歡喜の心」とお經にはある、歡喜の心が自分に十分に輝いた時に、それが佛様に感孚したのである。感孚といふのは親鳥が卵を温めて雛が解るやうな意味を言ふのである、親鳥の温りを感じて卵が解る、佛様を親鳥として我等の有つて居る卵はどんな工合に解るかと言へば、やはり我等の心の中にも悦びとなるべき素質があるからして、佛様を信すればその温りに依つて自分の心の中の悦びの雛が解れて、ビイ／＼と啼くやうになつて來るところが、佛教を信する者の感孚感激といふことでなければならぬ。

それは日蓮聖人に就て見ると能くわかる、聖人があゝいふ迫害の中に艱難辛苦を嘗めて、如何なる場合に於ても悦びを失はないで居られた。あれが眞に俺の留守に何かうまい事があつたナ」といふので、非常に疑つて亭主が嫉妬をやいて女房を責めた。その時に女房が「何も外に變つた事はありませぬ、たゞあなたの留守にお釋迦様の説教を聞いたところが非常に有難かつたから、何となく氣分が快くなつて、それでいつもとは態度が變つたのでせう、嘘だと思ふならばあなたも行つて御覽なさい、一遍にそんな苦蟲を嚼潰したやうな顔は無くなりませぬ」と言つた、亭主は半信半疑であつたが、翌日伴れ立つて釋尊の説教を聞いたところが實に感心した、「成程これは本當だ」と言つて感激して、それから夫婦とも非常な悦びの生活を遂げたといふことが阿含經の中にある、有名な話である。斯様にあまりに女房が愉快さうにして居るので亭主が嫉妬をやいたといふ、そこが佛法を信する信仰の一番大事な所を表はして居る。佛様が有難い、佛法を信じたといふことは佛の悦びが吾々に移る、吾々の苦しみに代つて佛のや

うな悦びが自分の心に殖えて來ることである。玄奘三藏が天竺に法を求めに行かれる途中山賊に襲はれて、あらゆる物を奪ひ取られてしまつた。その時に玄奘三藏が「サメン」と泣いて居られるを見て、山賊が言ふには「お前は立派な坊さんだと言ひながら、着物を剝がれて泣くやうなことでは偽者だナ」と言つて罵倒した、すると「いやそれは違ふ、俺はナニも自分の事で泣いたのではない、今お前等が、法を天竺に求める沙門の路銀なり衣服なりを奪つたとするとこれは大分罪の重い事である、一時の享樂の爲に追劔をして、行末は地獄に墮ちて酷い目に遭はなければならぬ、その辛い生活を繰返すことを考へると可哀さうでたまらなくなつたから俺は泣いて居る、自分の事を歎いて居るのではない、俺は佛法を信じて居るから、裸にされようが、凍えて死なうが涙を流すやうなことは無い」と言はれた、それを聽いて山賊が非常に驚いて「さういふ譯であり

ましたか」といふので、改心して玄奘の弟子になつて行つたといふことがある。さういふ風に佛法を信する者は世間の出來事に出會つても決して心を苦めない、自分は佛法を信じて居るが故に」といふ事に依つて、人の苦んだり悶えたりするやうな場合を切り開いて、そこに平和喜悅の情が見えて居る、さういふ點を強く考へて行かなければならぬ。そこで佛の妙覺といふ方面は今言ふ通り、たゞ智慧でもなければ慈悲でもなく、法悦法樂といふことであるが、佛の救濟の方面もやはり慈悲とは言ふけれども、その慈悲と同時にそこに大きな悦びが伴いて居るものであつて、佛の慈悲とは佛の悦びを以て吾々の苦しみ時代に代へようとするものである。ちやうど親子の上で考へてもやはりさうである、親の心といふものは子供に對する親切といふけれども、その悦び、その幸福を子供の上に與へんとするもので、子供の苦しみを除いて子供に幸福を與へんとする

心、これを親心といふので、たゞ親切といふだけの空靈なものではない。我が皇室の大御心と稱して居るものも、やはり人民に幸福を與へんとせられる御心である、即ち苦しみを除いて悦びを殖やさんとするところの御思召で在らせられる。それ故に吾々佛教徒が佛の御心に感ずると言つたならば、自然々々に自分の苦しみの心を滅じて悦びの心を取容れることが、佛様に感心して居ることになるのである。故に一切の悦びの本が佛にあるといふことを能く考へて佛を信すれば、吾々の心は満されるものである。悦びに活きることが出来るものである。それが本當に感孚して來ないのは、未だ佛の温りが入つて來ないから自分に悦びが足らないのである。本當に佛を信じ、佛の温りが自分の身に徹底すれば、必ず悦びの心が湧いて來るものである。それには素直な精神が最も大切なので、理窟張つた心ではない、ちやうど子が親を慕つて行くやうに、

柔和善順の心といふものが一番宜しいのである。自我偏に説かれて居る通り「質直にして意柔順に」である、質直といふのは飾りの無い素直な心である、さうして和いだる精神、そこに佛を見たてまつらんとする信仰が働けば、それに依つて感應忽ち起る譯である、この「質直意柔順」といふ飾りの無い素直な優しい心を以て、佛様の有難さを本當に考へて行くのである。それを考へようとするには、どうしても自分の魂ひが生れる時に出來たものでもなく、死んで消えるものでもない、永い／＼流轉を辿るその流轉の如何なる場合でも佛は心配して下さつた、どこ迄も自分の苦しみを救はんとし、惡業煩惱強くしてやり損ひを繰返して居る者を見捨てないで、飽く迄も救上げようとなさるところのその親切に對して感激しなければならぬ。我等の方は忘れる時もあり、感激の薄らぐ時があつても、佛様の慈悲、佛様の思召は我等から離れる時は無いのである、ち

ようど優しい親が、照るにつけても降るにつけても夜でも晝でも、如何なる場合でも子供の事を思ひ、事があり、縁に觸れ、ば子供の事を考へるが如くに、佛様は自分自身の左様な悦びの心を以て、さうして吾々にその悦びを與へんとして下さるのであるから、それを十分に味つてそれに感ずるやうな気分をより多く養つて行くのが信仰増進の人と言ふのである。たゞお經を澤山讀むといふことが信仰増進ではない、その心持を能く感ずるやうに訓練して行くことが大事なのである。だからそれには婦人が最も適して居るといふことになる、女の人でもだん／＼年を取つたりして世の中の事に苦勞して來ると、精神が荒むといふか、心がカサ／＼するやうになつて、質直意柔軟といふやうな柔直な和いだる精神がなくなる、ちやうど年取つた人の掌が脂氣が無くなる、絹の着物にでも觸ればカサ／＼引掛るやうな工合に、心までが年を取ると輝の出來た掌みたやう

にカサ／＼になる。さうすると質直意柔軟といふ譯に行かない、ゴツ／＼ガサ／＼といふことになるから、サウならぬやうに注意しなければならぬ、それが非常に大切な事である。肉體は年老り、世間ではお婆さんだけれども、佛の前に出れば十六七歳の娘心といふか、純真なる柔和な精神であるといふ風に、ニコ／＼して悦びの精神を受取る所が信仰の秘訣である。佛は親切ぢや、有難い／＼と言ふけれども、その有難さをば悦びの心で受けて行かなければ駄目である。年のいかな娘などは嬉しい事がなくとも笑つて居る、あれは餘程面白いと思ふ、何かコトツといふ音がすると先づ笑つて掛る、「何を笑ふ」と言へば又それがおかしいと言つて笑ひ出す、あゝいふやうな工合に、實に喜悅の精神に満ちて居るといふ所が人間の尊い所だと思ふのである。

そこで佛法を信する以上は他の事は姑く措いて、佛の前に立つ時はその柔和善順の心に活きて行くの

が第一の心掛けである。それが基礎になつて、それから南無妙法蓮華經を唱へ、お經を讀み、いろ／＼の宗教儀式が起るので、先以て宗教の信仰に立たうとする時に於ては自分の心を和けて、さうして佛様の優しい心、悦びの心、賢い心——智慧の方はチョット手の届かぬ所もあるけれども、親切の心、悦びの心といふものは吾々の情操であるから、これは最も接近し易きものである、それを學んで行かなければならぬ。佛の親切は有難いと言ひながら、自分は苦勞ばかりして始終アウ／＼溜息を吐いて居るのである。佛法を信する半分しか行つて居ないのである。眞に佛法を信すれば、有難い感謝の精神と同時に悦びの心を受容れて、悦びに飽滿せられ、あゝ有難い事だとお禮を言ふ心が出て來なければならぬ。尙ほそれに就てはお經文の上で證據立てれば明瞭になる譯であるけれども、今は一々その證據は擧げないが、さういふ心掛けが最も大事である。即ち佛

の心は悦びに満ちて居つて、どんな苦勞をしてもそれを苦勞とお考へなさらぬ、法華經の涌出品の時に上行菩薩が出現せられて、釋尊に御挨拶を申し上げて「なか／＼衆生教化の事は困難でありませぬが、お疲れはありませぬか」と言つた時に、釋尊が「イヤ少しも疲れはしない、さう心配したものではありません、割合に教化し易いものである、(本當は教化しにくいのであるけれども釋尊はさう言はれる)教化はし易い、疲れはせぬ、心配して呉れるな」と答へて居られる、あれが大事な所である。實際は面倒な事であり、厄介な事であつても、それを苦しみとせず疲れとせずして行く力が即ち悦びの力といふものである。日蓮聖人でもあの艱難迫害の中に立つて居られるながら、「どうも苦しくて堪まらない、これでは逆もやり切れない、どうしようか」といふことは一言も言はれないのである。頭を斬られるとか、雪の中に流されるとか言つたならば、普通の人間ならばこれ

は塔らんと悲鳴を擧げるだらうけれども、日蓮聖人はさういふ際に處して、「これはどの悦びを笑へかし」大に悦ばし」といふ言葉が出て来る。そこが今私のお話する通り、信仰といふものはたゞ有難いといふだけではない、悦びを願つた心、即ち佛の悦びに似た精神である。だから日蓮聖人の如き方になれば、辛い場合に於ても「悦ばしい哉」樂しみなり」といふことが出て来るのである。

吾々信心をする者はそこを學んで、世間の辛い事は勿論、又善い事をするに就て困難があつても、その困難を悦びの心に依つて打開いて、最後臨終の時まで信念を讀けなければならぬ。人間死といふことは辛い事だけれども、併し人間の果報が終つて、さて目出度く人生の終りを告るといふことになつたならば、平生教へられたる信仰に依つて、「これから行く前途はお釋迦様が頼りである。お釋迦様と一緒に進んで行きさへすれば恐しい所は何處にもない、實

に有難い事でありませぬ。モウ少し居たいとは思ひまされども、さう勝手な事も出来ませぬから、それでは左様なら……斯ういふだけの事で、ちやんとそこに心の開かれて行く所がある。それが無いと死に臨んで悶え苦しむことになるのである。どうぞ佛の信仰をさういふ意味に心得て、益々悦びの心を殖やし、柔和善順の精神に活きて行かれることをお勵めする次第である。(了)

正法を聽くに因あり、謂く善友に近くなり、善友に近くに因り、謂く信心なり、信心を起すに二因あり、謂く法を聽くと義を思惟すとなり。

涅 榮 經

天風三萬里紀行 (其四)

文部省囑託 小林 日 種

四、齊々哈爾より營口迄

四月廿二日

ハルビンに着いたのは朝の八時であつた。滿鐵地方事務所から早川運輸課長、國柱會ハルビン局からは寶珠山彌高氏、日蓮宗布教所からは石田日經氏、千葉懸人會からは中山次郎氏その他數氏が出迎えに出てゐて下さつた。直ちに宿所である古澤幸吉氏邸に赴いた。古澤氏は、本誌の舊い讀者である古澤たみ子氏の令兄で、古澤女史は、その入信の最初は私がお手引きしてゐるので古澤氏の母堂なども固く本化の信を抱いてゐた。そう云ふ關係にある私を遇する實に懇切丁寧で、この事情を知らざる人々をして奇異の感を抱かせる程であつた。古澤氏は、滿鐵の理事で、地方事務所の所長で加ふるに、ハルビン行政委員會の會長の職にあり、此の人の斡旋は非常

なる便益有つたは申す迄もない。

地方事務所の小形氏の案内で午前は、訪問午後は見物に費した。總領事八木元八氏は余の舊知代議士今井健彦氏の親友で、道塗の説は非常に好評の人である、北滿事情に關する氏との問答は夥しく余を益した。

文化協會會長、岩永浩氏も印象の深い人であつた。氏は國柱會の信行部員で、圓滿なる温厚なる、そして氣魄ある好箇の紳士であつた。

氏の如きは全國國柱會員の中でも出色の人であらう。商品陳列所の寶珠山彌高氏と、どつちとも言ひ難い、立正門下の至寶であると思つた。

午後からの見物は、並木のまばらな田舎路をドライグして馬家溝に横川沖はか四烈士の墓に先づ詣つた。壯大な碑が曠野に屹立してゐて、遠くからでも

よく見える。今日はその命日に遭逢すると云ふのも奇しく感じた。今では此處がハルピンの邦人信仰の中心對象になつてゐるらしい。

それから露西亞街、支那人街を零時ドライブした後、松花江の岸に出て来た時には、私は水に飢えてゐたと思はれる喜びで、心を躍らせた。柔かい張り切つた水の面のなめらかさと、その附近一帯の潤ひを含んだ空氣が、私の心に響き渡るやうな感動を傳へたのであつた。

ハルピンは全く私の眼には幻覺の都としか映らなかつた。松花江の岸の漁村を二十何年前に誰が見つけ出してあの直徑幾里かの大市街を組み立てたのかと云ふ事はまだ少しも不思議な神話にはなつてゐないだらうが、人が街の礎の石を運んだ場所のものゝ蘆原は、もう石だゝみの道ですつかり想像を消してしまつてゐる。あの曠野の一點に、人間は自分たちの明るい燈火を輝かさうとして區劃を造つたのであつた。然し旅をして曠野に驚いてゐる旅人はこの賑かな燈火を幻覺ではないかと思ふ。それは止められない強い驚きである。

午前は八木總領事の答禮を受け、又書信を認むる等に費した。

午後からはハルピン支那側の大官、孫廣庭、丁超、錢啓毅、徐成立諸氏並びに主人役たる滿鐵側の諸氏、並びに余と岡松師とを加へたる支那料理の大テーブルの宴會が古澤氏邸に催され、席上、話題は自づから余が中心にて、小乗佛教、大乘佛教の區別、並びに、日支親善の將來等にも及び、加ふるに、ハルピン一流の美形、三五酒間を斡旋し、興を添ふる處あり。歡談盡くる所を知らず。古澤氏の希望により、余の畫帳に各自記念の揮毫を爲し終りたるを以て最後として宴を閉ぢ。それより直ちに迎への自動車に打乗りて商品陳列館に至り、國柱會ハルピン局主催の講演會に臨んだ。

司會は寶珠山氏之を爲し余は『我觀日蓮主義』と題して平素の所懐を披瀝した。講演が終つたのが十一時近かつたので會場より直ちに驛に赴き北行の列車に投じた。

車窓より古澤氏、寶珠山氏、早川氏等に訣別を告げ汽車が走り出した後も、折柄陰曆十四日の月が、

キタイスカヤは、ハルピンのメイン・ストリートである。そこを通り抜けると停車場へ出た。そして私達は二十年前に伊藤公の狙撃された現場へ立つた。その地點は一二等待合室食堂へ向つて左から二番目と三番目の窓の中間、恰度鐵の支柱、前方線路寄りの個處だ。すべては時間が適當に處理するものだ、當年碧血のあと、今はたゞ、いくら見廻してもごこの停車場のブラットフォウムにもある。煤烟と風雨によつて、コンクリート平面の平凡な一部に過ぎない。

夜の講演は伊藤公記念館の樓上で開かれた。余は恩師、坪野平太郎先生と伊藤公との關係から説き起して純信至誠の精神が漸やく地を掃はんとする世態を慨し、強く叫びかける所有つた。此の夜は聴衆滿堂にて、殊に知識階級の全部を網羅し稀に見る盛會であつた。

司會は岩永浩氏之を爲し、講果て公の塑像像に一禮して記念帖に署名した。この夜は古澤氏邸に宿つた。

四月廿三日

あか／＼と無人の原野を照らし渡つてゐる魔の如き無氣味な光景が眼に入つて、強いて、クッションの中に頭を埋めて眠らうとしても、なか／＼眠り付かなかつた。

四月廿四日

何と云ふ寂しく、荒々しい單調だらう、目ははての地平線にある枯草が空を劃る、土の一線にまじりこんで、薄暗く濁つた空のあかるみの中に映つてゐるのである。二重窓の内から外から夜は明け放れた。列車は進む、そして、目に見えてゐるのは、何にも遮るものゝない広い平たい土である。私は茫然としてそれを見てゐた。停車場が一つ二つ過ぎた。私はちつと腰を下してゐるのにも倦んで、ドアを開けて外の廊下へ出た。

注意する心が新しく勇み立つたやうである。その時に静かなひつそりした鐘が、かん／＼と鳴つた。静かだがその響が廣い中に傳はつた。と、出發の相圖の笛が汽罐車から一聲短く響いた。そして列車が動き出した。

その鐘は發車の相圖であつた。そして何ともいへ

ない寂しい素朴な大廣野の感情をこめてゐた。私は驚いたやうに窓から見える野のはての地平線を見つめた。この曠野は、ハルピンの路で見て驚いた野よりも一層平らで、一層單調である。そして一層荒々しい。

幾時間走つても少しも變る事のない荒々しい平板な一つの線であつた。

正午近くになつてやつと昂々溪へ着いた。ハルピン領事館から電報を打つておいて呉れたので昂榮館の主人小島氏が従者をつれて出迎へに出てゐてくれた。

小島氏は支那服を着てゐて容貌も支那人に酷似し、且つ精悍の氣が眉宇に溢れてゐて一見軍事探偵を思はせるやうな人柄だつたから聞いてみたら矢張りその方を本職とする人であつた。

昂々溪の驛は平べつたい小さな石室のやうな停車場で、しんどしたまつ平らな廣場の中に、がつしりと築かれてゐるだけの事で何の奇もない。齊々哈爾へ行つたのは此處から昂齋輕便鐵路へ乗り換えねばならぬ、頭等へ乗つたがいやはや御粗末なものだ、

それに車中、何處の嫌なく唾を吐き散らすのだから汚なくて堪つたものぢやない。

チ、ハルへ着いたのは午後二時であつた。朝日館と云ふ當地一流の旅館に案内されたが、座敷には疊がなく板張りで、坐布團を重ねて坐ると云ふ次第である。滿鐵公所の平山氏の案内で城内並びに公園等を見物した。此處は政治及び軍事の必要上繁盛となつただけのもので、商業は振はず、對外的取引としては僅かに畜産物がほんの少しあると云ふ位の程度だから、名前だけは黑龍江省城の所在地だが、街はあんまり立派ではない。立派でないどころか、裏通りの支那街などときたら比類なく汚ない。埃のやうな泥にまみれて、野獸のやうに人が集まつてゐるだけの事である。私は、河床の細かい砂の上に建つたやうな街、埃が立ち迷つて汚れ切つてゐる灰の中の町のチ、ハルをドライブして歩いて、この埃の中で、オアシスさへ求めない人の心は一切何を求めてゐるのだらう。慄悍な戦と、大昔の心での富だらうか！等と思ひ惑ふた。

晚餐は滿鐵公所に招かれて馳走になり、午後七時

より同所に於て講演した。何にせよ邦人が百五十人しかゐるのに、同夜は七十人以上集つたのだから空前の成功と喜ばれた。その夜は、書信を書いたり、朝日館外二三氏より頼まれた揮毫等を爲し終つて寢たのは二時を過ぎてゐた。

四月廿五日

午前十時、清水領事の御招きを受けて官邸に赴き丁重なる饗應に預つた。午前十一時、清水領事その他多數の人々の見送りを受けて驛に赴き名残り惜しくも出發した。此の地はどんな思が有らうとも二度來る理由と必要が有るまいと思ふと、車窓から見る單調な景色にまで深き名残りが惜しまれた。ハルピンは夜であつた。鳥が羽を休めてまた飛び立つやうに、あわただしく長春行の汽車に又乗つてしまつた。私はもう窓の外を見なかつた、疲れてゐるので比較的よく眠れた。眠つてゐるうち、體は、南へくと返されてゐるのを微かに意識しながら……。

四月廿六日

長春へ着いたのが朝の七時であつた。谷口吉岡の二師が出迎えてゐて下さつて直ちに驛前、富士屋旅

館に投じて朝食を認め、それより地方事務所の今井氏の案内で見物に出た。

泥棒市場と云ふのが一番珍らしかつた。それはその名の如く、善良な市民が金を拂つて自分の盗まれた品物を買戻す市場だ。さればこそ靴の片方、下駄草履の片々が並べられてあつても不思議でも何でもなく買手が有る所だ。尤も、どうせ盗んで清めたものだから、誰が何を買つても差支えない。ひどく徹底した國民的施設である。

その他に於ては取りたつて言ふべき程のものはない。

午後からは仁保氏の宅に招かれて御馳走になつた。講演は午後八時から社員俱樂部であつた。經王寺の信徒も多數見えて居られて、なか／＼の盛會だつた。講演がすむとそのまゝ、すぐ驛に赴いた。經王寺の信徒諸氏、滿鐵側の諸氏、千葉縣人會の諸氏等で見送りは非常に多數であつた、斯くて午後十一時發の南下の夜行に投じた。

四月廿七日

營口へ歸着したのは午後一時であつた。内地から

の手紙が拾數本待ち受けてゐた事は嬉しかつた。此の日は整理と書信を認める事に費した。

四月廿八日

立教開宗の聖日である、早起して佛前に讀經した思へば余も、本年は三十二才、大いに奮發せざるべからざるを痛感した。昨年今日は房州館山の城山の山巔にて遙かに清澄の峯を打仰いで讀經唱題した。そしてその節明年の今日は、滿五ヶ年間、續け來つた旭日唱題會の唱導の主となり得ないであらうと語つた時には、人々は奇異の面持をしてゐた。余とてもさして期したる事が有つたわけではないが、唯だ明年は何となく海外へ出られそんな気分がしてゐた事は事實である。今年も、推津智正を導師として例年に劣らぬ、否例年以上に、盛大に、併せて余の旅中の平安をも祈念すべく舉行するさうだ。昨日受けた信徒からの便りにそんな事が書いてあつたら、今頃は、聲も惜しまず祈念の唱題を續けてゐる時と思ふと嚴肅な気分になつて、思はず、眼がしらの熱くなるを覺えた。

明日は早朝旅順に立たねばならず、且つ今度は一

人旅だから何くれとなく用意に忙しかつた。岡松師は人も知る如く余の同窓の先輩である。而して師の余を遇する真に懇切周到、後輩を愛撫し、庇護する師の如きは真に稀なりとせぬばならぬ。同行十數日、曾て倦色無く余をしてその使命を十二分に果さしめたる。口頭面皮の親切の人のよく爲し得る業でない。詰して以て永く謝意を表する次第である。

記事

教化運動

吾人の教化運動が意識者の動く處となつたか、今回教化總動員の實現を見るは眞に悦ばしい次第で、素より吾等は永遠に涉つて進軍するが此の動員令のあつた第一着に次の通り教化大議會を開催した。

日時 九月十四日(土)午後六時半開會

會場 本所區外手町、外手小學校講堂

此の日は久振りの秋晴れで而かも外手町の祭禮にも不拘、定刻には早くも三百人の入場あり、先づ大震災火災の愴然たる映畫に始まり、當時深刻なる体験を経たる人々の多き此地方には殊に委々たる三日間の燒跡、遺骨の累々たる慘狀等其の追懐慄然として轉感無量であつた。電燈の照された時には滿場座席なく、七時半梶木顯正師の「開會の辭」、次で中村藤吉氏の「精神作興の詔書」捧讀あり、續いて柴田一能師は「國家觀念の謬を是正せよ」と一部の人達が我大日本の國家も歐米の國家も同一觀念を以て一列に見做さんとする謬見を見事に打破された、小林一郎氏は「復興の根本義に就て」と題し震

災歿死者の無言の活教訓より進みて精神的の復興こそ眞の復興なるべしと高調力説され、滿堂の來聴は特に甚大なる感激を興へられた、終りに在郷軍人會本所區分會副長喜多武秀氏は「所感」を以て閉會の辭にあてられ、それより餘興の狂言「日嗣の皇子」は小田糧水嬢により彈奏された。當夜は戰慄すべき涙多き記念の映畫に始まり中間に於て反省すべき激震の講演あつて最後に此の雄健莊重なる畏き一幕に聴衆悉く緊張せるを見受けられた、それは閉會に際し若野直英閣下の萬歳三唱が能くこれを立證するに足りる、時に午後十一時。

北米の野口上人

(第五信)

拜啓 桑港は土用中なれども寒く單衣を三枚かさねても風邪氣にかゝり候然し中央部は熱しと聞き及び候市内は立派に候得共布教會等色々忙がしく末だ一度も見物致さず候布教の難きに無之準備の難きに有之候一昨日は桑港日本人會館に歐洲大戰々死者英靈在米同胞先亡精靈大追悼會を虔修致候
領事會長の慈惠會代表本願寺禪宗日蓮信徒代表之弔詞白人の參拜皆々燒香人數は滿堂二百人位に有之世

界的法要に有之候宿縁を結びしもの多大に有之其の
他白人側にも三回講演致し揮毫も致候本日又白人
側に招待講演に参り候今晚信者之會合も有之明日宣
傳揮毫及び講演會、明後日加州大學及びスタンフォ
ード大學(是は一箇人の寄附)參觀に参り十七日ロス
アンゼルスに向ひ候又色々まじりてより可申上候
明日日本の船桑港出發日本に歸へると聞き候へば不
敢取認候内地は酷暑い事と存候皆々様おからだ大切
に願上候

南無妙法蓮華經

桑港にて

日 主 拜

八月十三日

(尙追白として別紙左の一文あり)

追白 本日招かれ候家は桑港より海を渡り汽車に乗
り自動車にて四五哩の地に候庭園は公園之如く大に
家は印度にて切組み善美を盡せり、注文により携へ
し金蘭装の本尊を祭り自我偈を誦し法華經と日蓮聖
人の本懐を講話致候席上求道男女貴婦人五六名種々
質問せり夫々答へ後二階三階案内に應じ拜見せしに
種々佛像の中に日蓮聖人御像二体發見せり、日蓮聖

存候

人傳を語りし後の事とて誠に不思議亦主人之婦人二
月十六日日蓮聖人之誕生日と同じなりとて日蓮聖人
を更に祭り開眼し御經をこの事にて更に自我偈唱題
不思議因縁し法話をなす、合掌、感謝を表せられ候
是又大に宿縁を結びし事と存候二、三軒も同じ様の
家に招せられ何れ名前を記し申送る可く候質問も中
々面白きもの有之候

皆 様

の ぐ ち 拜

ペンが安物故能く不書候否歐字不手か、
西洋人は大佛教を求めつゝあり、二陣三陣必要と
存候

塔婆は巾二尺長一丈八尺廣大のものを日本人共同
墓地に昨日建設致し回向候裏には西洋人之歐文を
書て貰ひ候 世界的に候 以上

(第六信)

去る八月廿五日付を以てカリホルニヤ ロスアン
ゼルス留錫中の野口日主師より左の長文の來信が
ありました。

拜啓

南無妙法蓮華經

ロスアンゼルスにて

八月廿一日

日 主 拜

十七日午後八時四十分ロスアンゼルスに着候翌日
本願寺會館にて大乘會主催講演に出席 従是歡迎個
話會信仰座談會文化講演會書道談話會同記念揮毫、
白人布教大追弔會相濟セシヤトルに向ひ候 ロスア
ンゼルスは近年非常に發展市の廣さ四四一平方哩は
るか大東京より倍大かと存候 近年油の涌出產額四
億五千萬弗(壹弗は現在日本金之貳圓以上)活動フキ
ルム二億弗(活動寫眞の本場との事なり)其の他柑橘
野菜其他工業にて年額壹億萬弗以上と聞く日本國も
奮勵せざる可からずと思ふ、日本宗教は兩本願寺禪
宗眞言日蓮宗何れも活動致居り唯基督一婦人之會堂
可驚活動振りなり、善美を盡せり、建築費百五十萬
弗と物語れり(參觀時當役員の談)これを思へば日
本は末だ桃源洞埋之境界かと存候 米國全体東は午
後なり、西海岸日之出の勢と聞及候西海岸にても將
來の發展ロスアンゼルスなるべしと一齊に申居り候
白人も一神教にものたらず或はバハイ教或は今之一
婦人の運動、或は佛教を求めつゝあり。統一神教に
移る時代と存候先は右迄書外又々可申上候 結各位
壯建候

本日ロスアンゼルス市外十二、三哩郊外地にカト
リツクの古寺を參觀致候昔スペイン國隆盛時カリホ
ルニヤ。スペイン領の時カトリック教寺院を建て亞米
利加インデアンを教化せし跡なり、建築及規模廣大
なり、未開の地に如是寺院建立教化に勵みし事は宗
教の否やに關らず世人は一齊に基督教に入りしなる
べし。

然もカリホルニヤ洲驛毎に一寺院を建て旅人は休
み泊りに便せりと聞く、今日此頃はカトリック復興
の時故參觀者も多く見へ候何れスペイン盛大時故國
力か傳導會社にての經營なるべし、日本も米國要所
に一大寺院建立候はば白人白人は擧て佛教信者とな
るべし。機運熟し居る様思はるゝなり、多神教は野蠻
の宗教也一神教は物足らず、統一神教の時到来り日
本佛教海外宣傳の急務時なり、否日蓮教海外宣傳の
急務時なり、日蓮教と共に天照大神の光を顯揚し國

咸自ら顯揚なり、日本國家及び日蓮主義者一大奮勵の時と存候禪真言日蓮宗何れも宣教者参り居候へ共衣食に追はれ他に向て布教は中々に候只獨り本願寺のみは信徒も多く會堂に二、三十萬の金を費して建築せし故各地とも何宗に拘らず本願寺に参り結婚葬式を頼む有様に候其外の日本人は基督會堂に参りて得々たる有様に候此委故白人に向て布教は前途遠なり、彼等は佛敎及び東洋文化を求めつゝあるも其人と其機關と無き故只はるかにあこがれて居るのみ

私は桑港方面にて白人の會館及白人の財産家の集りに招かれて講演する場合紫衣七條楯扇水晶の念珠の出で立にて所持曼茶羅金燭表裝の大本尊を懸け先づ久遠偈を讀誦し散華を降して而して後講話し候、散華と七條姿を喜びて「我等は東洋に心を奔せ居るも今日東洋に行きし感あり、又花の天國の如き此日を永久に忘れず云々、感謝を受候、亦英譯本尊と日本尊を是非載かして呉れとて夫れを大切に機胸にはさみ自動車にて家路へ歸る様佛敎の縁熟する者と察せられ候又白絹を持ち來り一筆書を呉れと頼まれ候故日本絹に似て居ると申せば、「日本へ新婚旅行に

参りし時買ひ求めたるものと云ふ、それを幾つにも切り、一字宛書て皆で分ると云ふ、經文一句を書て佐藤中將刻印及び他の印を押し候へば絹無きものはガマ口の裏へ押し呉れと頼まれガマ口無きものは帽子の横ギヌに押し呉れと云ふ、其の求道と其の無邪氣掬すべきなり、而し移民法の事に到りては政治的方面嚴しき様に候是を和らぐ佛敎宣傳あるのみ、ご愚考候佛敎の眞理に向ては白人誰人も頭を下る事と存候 又々可申上候

八月廿五日夜認之

ロスアンゼルスにて

日 主 拜

縁を求めての宣傳故米國も思の外永く相成候 從是シャトル方面へ伺ひ候併し開教は容易に非ず、下種結縁と思ひ基の一目と思ひ内外人に出來得る限り宣傳に勵み候船中にては日記を認め候へ共上陸後は雜多の用にて晝夜境なくメチャクに候 小生活動(蠢動か?)新聞に出で候分は切抜き帳面に張り置候夫れも一々は出來申さず候しきりに皆様の夢を能く見候亦亡くなりし人の夢を能く見候古き昔し死せし

人の夢を見候小納の爲法に盡すのを喜びて見るのか、迎へに來るのか、或ひは夢を喜び、或は心細くも御座候佐藤中將始め皆様に出現差上度存居候も上書きの歐字不手故無音勝に候さりとて知人に一々頼むも面目よからず貴下様方より宜敷願上候 一二回通信用の出狀相送候中外及宗内の雜誌におのせ被下候や中外に出すれば各宗へはそれにて御免被

り宗内にも報導にかへ度候よろしく願上候 結縁の爲信仰の爲築筆致居候併しルームがせまき故ガラス入額面か、小幅にて筆太の分は秒く候子供は日本語は分らぬ有様二世の問題大切の時に候四思教林日曜學校等よろしく願上候

八月廿五日夜

日 主 拜

教 報

●統一閣本部教戦録

△七月十六日の正午開會で例に依り「自慶會 大慰安會」を統一閣に開きました、開會之 辭榎本顯正師、講話、文學士小林一郎先生、 終つて餘興、「百面相」柳亭鯉鱈紙切り「三 遊亭潤吉」落語「三遊亭潤右」薩摩琵琶(伊 豆の御経)「水越蓮葉」講談「大島伯耆」音 曲等「三遊亭萬橋」太神樂「丸一織友」織太 郎等數番、來會者四百餘名 暑氣正に八 八九度 本年は全く文字通りの酷暑だつ た。暑中例に依り日曜講演は七月第二より 九月第二まで休會)

△八月三十日午後一時開會「關東大震災七週 年追悼大法要並記念講演會」天下の心願を

寒からしめた大震災も早いもので七週年忌 を迎へた統一閣では九月一日は各所に追悼 會が催されて出席する人も多からんと氣を きかせてこの日にした。東京寺院十數師の 御出席を得て本多總裁祝下導師のもとに嚴 肅なる追悼法要を営み續いて「大震災の教 訓と佛敎」と題して本多現下は約二時間に 亘り種々教誡され來會者一同深く心に銘す る處があつた、當日來會者二百五十餘名、 一同に供物(菓子)を頒ちたり、天氣晴朝午 後四時半散會した。

△九月八日(第二日曜)午後一時開會、晴、暫 らく休んで居た日曜講演も本日曜より再開 「同胞の爲に泣く聖者」榎本顯正「村上博士 の眞宗より見たる日蓮宗に就て」磯部滿事 「我が國の經濟現狀と日蓮主義」田中道爾 「佛の道を奉じて」小西日喜師等、來會者六十餘名、何れも各講師の熱辨に聴衆の

心は愈々引きしまり。特に田中道爾氏の現 下經濟事情の委曲を盡されたお話には一同 自ら慄然たるものがあつた、司會者として 法雨甚大意義洋々を感誦して午後五時閉 會。

△同十五日(第三日曜)午後二時開會、晴、法 要に次で講演會、本多現下の「信仰の根據」 に對する二時間の長講話に益々吾等の信仰 の根柢は深められ非科學的なる一般日蓮門 下の野蠻的なる信仰に對して科學的に眞理 づけられ愈々磐石の如く堅く、松村介石氏 が讀賣新聞の宗教欄で發して居る法華宗に 對する質問の如きは縱横に論議され聽衆一 統大滿悅同四時半開會、同五時より知法思 國會の教化屋外運動に關する理事會を開き 協議會を開いた、顧問の矢野茂閣下、望月 日讀師等も見えた。

△同廿二日(第四日曜)午後一時開會、「宗教

「現賞」中村清二「講題未定」伊藤竹三郎、山口智光、和賀義見師等出席。

市外教信

市川立正會は、市川町大門通り、大日本立正會館に於て、大震災七週年追悼堂に大講演會を開催した。定刻六時、鈴木日雄師、大導師の座につくや木村日香師、池澤泰明師、鈴木秀學師、鶴澤泰通師、田口公信師並に會員參列者の讃誦唱題の莊嚴裡に追悼會を奉行し七時講演會に入る。

開會の辭
 同胞よ奮ひ起て
 天地の命脈と法華經
 運命と努力
 災火災の七週年に直面して
 出火宅の大道
 參會の總衆は立錫の餘地所でなく全く會館に溢れる盛況、二班に分れし山田義一氏、平林隆作氏、梅澤勇氏、池澤泰明師、木村日香師の街頭宣傳隊も亦多大の奏効を得て引き揚ぐ、尙小澤源助、松澤、伊藤、中川、荒川、大木、片柳、藤田、吉田、中島、梅澤の各幹事並に森、佐々木、島井、渡邊、大倉、龜澤、須山、服部、河合兄弟等會員諸氏の前後來の宣傳、ビラ撒布、會場、道路で提灯メカホン

での活動は此の會をしてかくあらしめた事を附記して置かねばならない。

名古屋教誌

八月七日 原田日雄師
 八月八日 原田日雄師
 八月十六日 常樂寺にて益の由來
 八月廿一日 鐵山寺(本佛と忘れたる各宗) 秋葉日度師
 八月二十二日 妙行寺にて(救苦法) 原田日雄師
 己上
 八月三十一日

大阪教報

◎八月八日蓮成寺にて孟蘭盆に就て上田師◎
 十二日堂親寺にて日蓮主義講要京師、佛敎の概要上田師九月八日蓮成寺にて法華經行者の態度和井田氏六波羅密に就て京師◎十一日峰谷邸にて精神敎化京師、完全なる信仰と實踐能仁權大僧正◎十五日刀根山病院にて日蓮聖人の特長京師、佛敎何れも頗る盛會多大の効果を奏せり。
 因みに京師布敎師は今同司法保護事業講習の爲め十月一日より十一月末迄上京東京市外品川町南馬場妙蓮寺に滞留の由。

金澤教報

誌料領收

自八月廿一日
 至九月廿一日

一金四圓也	北 海道	木 原 文 靜 殿	一金貳圓貳拾錢也
一金四圓四十錢也	東 京	三 浦 惣 太 郎 殿	一金六圓六十錢也
一金壹圓拾錢也	東 京	山 田 豊 次 郎 殿	一金貳圓五拾錢也
一金四圓四拾錢也	愛 知	三 城 房 吉 殿	一金六圓六拾錢也
一金拾壹圓也	東 京	柴 田 武 治 殿	一金貳圓貳拾錢也
一金八拾貳錢也	北 海道	本 澤 隆 正 殿	一金九圓也
一金貳圓貳拾錢也	東 京	三 谷 芳 一 殿	一金貳圓貳拾錢也
一金貳圓貳拾錢也	東 京	稻 葉 あ い 子 殿	一金貳圓貳拾錢也
一金六圓六拾錢也	東 京	金 子 光 和 殿	一金四圓四拾錢也
一金貳圓貳拾錢也	東 京	藤 崎 勲 三 郎 殿	一金貳圓貳拾錢也
一金貳圓貳拾錢也	東 京	竹 内 太 八 郎 殿	一金壹圓也
一金四圓四拾錢也	東 京	杉 本 み さ を 殿	一金四圓四拾錢也
一金四圓四拾錢也	東 京	水 谷 市 太 郎 殿	一金貳圓貳拾錢也
一金貳圓貳拾錢也	東 京	田 中 邦 吉 殿	一金貳圓貳拾錢也
一金六圓六拾錢也	東 京	時 友 太 助 殿	一金拾壹圓也
一金六圓六拾錢也	東 京	谷 口 楠 吉 殿	一金四圓四拾錢也
一金五圓也	東 京	西 山 吉 五 郎 殿	一金四圓四拾錢也
一金貳圓貳拾錢也	東 京	伊 東 竹 三 郎 殿	一金拾壹圓也
一金貳圓貳拾錢也	東 京	高 階 虎 次 郎 殿	一金參拾四圓也
一金壹圓貳拾錢也	東 京	山 本 信 次 殿	一金貳圓四拾錢也
一金壹圓六拾錢也	東 京	石 和 田 喜 和 殿	一金貳圓貳拾錢也
	東 京	山 本 幸 次 郎 殿	一金貳圓也

▲精神講話八月五日石川縣若松村に於て 名教を確立せよ 能仁 一十師
 ▲家庭講話八月六日川岸町渡邊宅にて 心を宿として 能仁 一十師
 ▲青年會講話八月八日日本ノ新保町青年會にて 愛は強し 能仁 一十師
 ▲常樂會八月十五日日本覺寺に於て 佛敎の旨義 本郷常次 氏
 ▲佛敎講話八月二十日立正寺に於て 富元 會榮師
 ▲佛と善人 富元 會榮師
 ▲信仰講話八月二十二日本長寺にて 法悦に住して 能仁 一十師
 ▲精神講話八月二十五日縣下森本青年團のた めに 能仁 一十師
 ▲愛と汗 能仁 一十師
 ▲天晴會八月二十六日本長寺に於て 日蓮上人の敎義 本郷常次郎氏
 ▲國亂れて國土日寇を憶ふ 能仁 一十師
 ▲開山會八月二十八日本行寺にて 眞實の力は強し 能仁 一十師
 ▲家庭講話八月二十九日本多町河合氏宅 法華經を身に讀みし人々 能仁 一十師

福島教信

郡山市開拓の爲に勇猛精進止暇睡眠の整調を色續しつゝある郡山本團は去る八月廿八日夜道路布敎を開始し中島元道師菅野顯孝師五十嵐治郎左衛門氏子息等各々熱辯をふるへ市民の反省を求め盛會の裡に散會せり。

愛 知	山 本 金 太 殿
神 戶	辻 俊 泰 殿
東 京	戸 村 大 三 郎 殿
千 葉	平 山 三 藏 殿
小 田 原	中 村 銀 藏 殿
豊 橋	服 部 平 之 助 殿
神 戶	熊 井 本 光 殿
紀 伊	乾 涼 甫 殿
熊 本	村 上 辰 彦 殿
宇 都 宮	樋 口 定 治 殿
鶴 岡	赤 谷 重 郎 殿
東 京	山 路 益 三 殿
同	唱 行 會 殿
京 都	大 塚 英 太 郎 殿
同	細 野 長 雄 殿
大 阪	谷 奥 音 男 殿
四 日 市	兒 玉 小 治 良 殿
神 奈 川	古 屋 道 太 郎 殿
兵 庫	石 川 日 全 殿
岡 山	須 山 茂 三 郎 殿
山 口	妙 蓮 寺 殿
福 島	伊 藤 ト シ 殿
山 梨	大 野 日 通 殿
室 蘭	三 田 村 圓 通 殿

一金拾六圓六拾錢也
 一金二圓二十錢也
 一金四圓四十錢也
 一金參拾圓也
 一金五圓也
 一金四圓四十錢也
 一金八圓八十錢也
 一金四圓八十錢也
 一金二圓也
 一金二圓二十錢也
 一金五圓也
 一金四圓也
 一金一圓二十錢也
 一金八圓八十錢也
 一金參圓也
 一金六圓六十錢也
 一金二圓八十錢也
 一金五圓也
 一金四圓四十錢也
 一金二圓二十錢也
 一金六圓四十錢也
 一金二圓二十錢也
 一金二圓二十錢也
 一金二圓二十錢也

廣
 島
 東 市川謙太郎殿 一金二圓也
 大 阪 川上芳子殿 一金二圓二十錢也
 東 京 梅若美香子殿 一金七圓八十錢也
 東 京 清水一乘殿 一金二圓二十錢也
 名 古 屋 由本松之助殿 一金四圓四十錢也
 大 阪 平松林三郎殿 一金二圓二十錢也
 同 山 中國アニリン染料製造所殿 一金二圓二十錢也
 北 海 道 上川勝四郎殿 一金二圓二十錢也
 同 三谷完市殿 一金四圓四十錢也
 同 福士忠治殿 一金參圓參拾錢也
 東 京 高田保太郎殿 一金三圓四十錢也
 大 阪 武田萬次郎殿 一金五圓也
 東 京 青山信市殿 一金二圓二十錢也
 千 葉 片岡盛助殿 一金二圓二十錢也
 東 京 久城勝三郎殿 一金參圓也
 大 阪 增田智雄殿 一金二圓二十錢也
 同 榎原荒治殿 一金四圓四十錢也
 長 崎 松本永次郎殿 一金二圓二十錢也
 東 京 古田慶三殿 一金八十錢也
 伊 東 川村幸重殿 一金五圓八十錢也
 京 都 西澤日盛殿 一金五圓也
 大 阪 和井田寛再殿 一金二圓二十錢也
 同 古嶋徳次郎殿 一金壹圓五拾錢也
 山 口 小高典吉殿 一金二圓四十錢也

五〇
 福 井 福井末吉殿
 秋 田 加賀谷徳治殿
 盛 岡 湯淺正兵衛殿
 東 京 稻葉葉之輔殿
 長 崎 永見京造殿
 同 平岡龜雄殿
 同 廣瀬喜一殿
 東 京 有住千代殿
 同 永井米藏殿
 同 田中常盛殿
 兵 庫 小川透殿
 同 山 林啓太郎殿
 石 狩 長嶋長次郎殿
 千 葉 若林よね殿
 東 京 榎田鐵太郎殿
 同 田中盛秀殿
 同 和賀義見殿
 東 京 鍋田勇吉殿
 名 古 屋 三輪芳太郎殿
 大 阪 虎谷喜太郎殿
 新 瀧 川島ざん殿
 青 森 柏木吾市殿
 兵 庫 中須半介殿

一金四圓四十錢也
 一金二圓二十錢也
 一金二圓二十錢也
 一金拾參圓也
 一金參圓四十錢也
 一金二圓四十七錢也
 一金二十四圓也
 一金壹圓五拾錢也
 一金二圓二十錢也
 一金三圓四十錢也
 一金二圓二十錢也
 一金壹圓二十錢也
 一金二圓四十六錢也
 一金三圓四拾錢也
 一金二圓二十錢也
 一金四圓也
 一金二圓二十錢也
 一金四圓八十錢也
 一金二圓八十錢也
 一金二圓二十錢也
 一金二圓二十錢也

「統 一」 會 計
 福 井 宮川順學殿
 大 阪 加藤豊三郎殿
 同 瀨戸崎彌市殿
 同 五十嵐治郎左衛門殿
 同 中井喜八郎殿
 同 中谷佐一殿
 高 岡 研 究 命殿
 盛 岡 池田親海殿
 川 崎 堀川福太郎殿
 明 石 島田次三郎殿
 朝 鮮 小倉徳藏殿
 東 京 田中盛徳殿
 同 風戸三藏殿
 千 葉 飯泉基政殿
 茨 城 小高 清殿
 東 京 時友仙次郎殿
 橫 濱 川島直次郎殿
 靜 岡 川島直次郎殿
 金 澤 吉原盛武殿
 濱 松 彦坂寅吉殿
 奈 良 出口馬太郎殿
 東 京 府 中崎 英殿

新刊豫約を募る

本多現下著

日蓮主義精要

定價 金參圓
送料 拾四錢

本書收むる所先づ法華部の大觀より進
 み曩の法華經要義と日蓮主義心髓の要
 諦に及び更に阿含經、世法の開顯あり、
 釋迦如來、本尊論、唱題の意義及び二大
 御堂の綱要等悉く日生現下の熱誠の結
 晶にあらざるなし實に求道の諸賢必須
 の好著なり。

發行は十一月の豫告、豫約申込期日
 十月十五日限り、定價の二割引以後
 は一割引とす。

昭和四年九月下旬

東京府品川町妙國寺内

教 發行所

振替東京一〇九四〇番

右雜有入帳仕候



目 次

信仰の根據……………	本多日生
天風三萬里紀行(其四)……………	小林日種
諸教の批判(其一)……………	松村介石
記 事……………	………
○在米の野口上人、	○各地教報

第三十四年十一月號

第四百五十五號
第四百五十六號

編輯者 磯部滿事
發行人 磯部滿事
印刷所 都 印刷所
東京府墨田區錦町五丁目八十一番地
電話號碼六三〇四號
本誌定價 一冊 五分
發行所 統一發行所
東京府墨田區錦町五丁目八十二番地
電話號碼六三〇五號